

尾崎喜八資料

第 14 号

特集 尾崎喜八による千家元麿

——千家元麿没後五十年を期して——

彫刻 尾崎喜八	2
運命を決したもの	3
千家元麿君の芸術に就て	4
解説 新潮文庫 千家元麿詩集	8
千家元麿の人と作品・詩の解説	13
蛇窪から	17
碧落荘私記	18
「感じ」の表現者	19
詩集「夏草」を読んで	20
もっと深い自然の中へ	22
手紙一つ／千家元麿	24
*	
千家元麿と尾崎喜八の交流／嘉納忠明	25
尾崎喜八とフランスの作家たち その二／中原好文	33
研究会だより／尾崎栄子	38
一年のできごと・編集後記	40
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会

1998年10月

彫

刻

(敬愛する千家元麿兄に捧ぐ)

尾崎喜八

ロワール河の金いろの胸と
イールド フランスの鍍錆たる紫の地平線と
花に満ちた果樹園や、豊饒な野や
その温雅な大氣や、そよかぜや

そして日毎かなたの空に浮かぶ雲の高彫りとから生れたおんみ
水浴する少女よ

おんみの幸福な無邪氣と、又と來ない生命の春とは
この純白な大理石に満ち盛られて

あの巨匠の手によつて永遠にされた

七月が涼しい樹蔭をつくる小川の縁に座して
きらきら躍る反射を顔にうけながら

その繻子のやうな水をおんみは波立たす

波紋の模様をもつとたくさんにする面白さに
又ときどき水面ちかく浮かんで来ては

むらがつた藻の下に姿を匿す小魚の驚きを見る面白さに
おんみが聴くともなしに聴くものは

岩角をめぐる水の堅琴と鶴のピコロ

そしておんみのまはりには多幸な祖国の田園と
遙かな森と、更に遙かな地平線と

また悠久な夏の青空と
しかも、春そのものが身を傾けてゐるやうな
おんみの全体軀のなんといふ比類なき豊麗、健康

生命なき大理石から叡智と愛と全能の手とによつて生れたおんみ
女性の青春の一切を賦与されながら時の一点に生きるおんみは
年月の潮流と石の崩壊とを立ちこえて

巨匠オーギュスト ロダンの名を

その不滅の美をもつて永劫に飾りくゆらすのだ

(「日本詩人」大正十一年四月)

なんといふ確実な釣合と明淨な線のながれ
ひろびろした明るみはおんみを包み
夢みる陰のモスリンはおんみにまつはる
芸術家の讃嘆と意力とが

鑿の愛撫をもつておんみの妙齡の一切を不死たらしめたのだ

水際に立つ菖蒲の骨組、五月の杏の花の肉
ほがらかな性の夜明けと愛の巣と

おんみは憂愁や日没からは生れて来なかつた
悦びの朝と幸の春とが或るワルカンの手をかりて

おんみの生命と肉体とを岩の塊りから鍛へ出した

瞳は空と海、脣は石竹の花

そして日を浴びた山楂の藪のやうな髪の毛の下に

黎明のいさぎよさを持つおんみの額は目ざめ

生に満ちた肉付けは

胴体や四肢の花ぞのを爛漫たらしめながら

なお溢れる光の中にその整々たる輪廓をきめる

生命なき大理石から叡智と愛と全能の手とによつて生れたおんみ
女性の青春の一切を賦与されながら時の一点に生きるおんみは

年月の潮流と石の崩壊とを立ちこえて

尾崎喜八による千家元麿

—特集・千家元麿没後五十年を期して—

千家元麿は、尾崎の詩人としての出発の時期に、大きな励ましと影響を与えた年長の友人として、度々尾崎の文章中に言及されてきた（たとえば『音楽への愛と感謝』中、「*I* 生い立ちと音楽」の項）。今回の特集の最初の動機としては、他の詩人を論じることをあまりしなかつた尾崎には珍しく、幾つかのまとまった論評があり、また千家没後に出版された文庫や詩人全集に於いては編集の労まで執るという、異例の交流の深さに注目しようという程度のものだった。しかし、全集、詩集の解説類の調査が一段落した後に、嘉納忠明氏が、さらに戦前の雑誌までも検索して下さった結果、当初の疑惑を超えて、尾崎の第一詩集成立前後の文学的環境を浮き彫りにする、きわめて重要な交流が、文献的に確認された。従来、この時期の尾崎は、「白樺派の影響下に詩作を開始、云々」と大雑把に書かれてきたが、千家との交流に注目することで、当時の細かい事情がより明確に浮かび上がってくるという、思いがけない大きな成果を得ることができた。その詳細は、二五頁からの嘉納氏の「千家元麿と尾崎喜八の交流」を、ぜひお読みいただきたい。

本特集では、二人の交流が壇のよう^{（もつば）}に熱い大正十年代、尾崎が『花咲ける孤獨』の絶巔を越えた昭和二十七（一九四二）八年、そして最晩年の昭和四十四年の論評を掲載した。そこには、五十年の歳月を経て、尾崎の中で変遷した千家像と、不動の友情とを、読みとることがで

きる。

千家元麿は、尾崎の詩人としての出発の時期に、大きな励ましと影響を与えた年長の友人として、度々尾崎の文章中に言及されてきた（たとえば『音楽への愛と感謝』中、「*I* 生い立ちと音楽」の項）。今回の特集の最初の動機としては、他の詩人を論じることをあまりしなかつた尾崎には珍しく、幾つかのまとまった論評があり、また千家没後に出版された文庫や詩人全集に於いては編集の労まで執るという、異例の交流の深さに注目しようという程度のものだった。しかし、全集、詩集の解説類の調査が一段落した後に、嘉納忠明氏が、さらに戦前の雑誌までも検索して下さった結果、当初の疑惑を超えて、尾崎の第一詩集成立前後の文学的環境を浮き彫りにする、きわめて重要な交流が、文献的に確認された。従来、この時期の尾崎は、「白樺派の影響下に詩作を開始、云々」と大雑把に書かれてきたが、千家との交流に注目することで、当時の細かい事情がより明確に浮かび上がってくるという、思いがけない大きな成果を得ることができた。その詳細は、二五頁からの嘉納氏の「千家元麿と尾崎喜八の交流」を、ぜひお読みいただきたい。

（石黒敦彦・記）

「青春」という事を言われて自分のその時代を考えると、ひどく遠い昔となつたような気もするし、またつい昨日のことのようにも思われる。かえりみる六十年の風光は茫茫と色あせてゐるのに、ある名、ある物、ある場所の意味は、かつての時の中からそれぞれの姿と共に立ち上がって、なつかしく私に近づいて来るからである。

そしてそれ等の「意味」こそは、追憶に生きている「おもかげ」と共に、私にとつての宝であり富である。

たとえその名、その物、その場所は、私を遠く、他の地平線に、彼等の固有の運命を、いよいよ強く美しく生きていくようとも。青春は、私にあって、やはり他の多くの人

運命を決したもの

東京新聞

昭和 27 年 11 月 4 日

達と同じように、烈しい向う見ずな恋愛と芸術への愛とをもつて初まつたように思われる。一方はその愚かに利己的な私の恋に貴い身と心とをささげつくした女人であり、他方は幾多の迷路を与えたながら、ともかくも今日の此処まで私を連れて来た芸術である。すなわち私の青春はことごとくこの二つのものに負うている。

然し今は恋愛を語るまい。多摩川の流にのぞむこの淡烟草舎の小さい窓に、これを最後と生涯の夕日の映る時まで待とう。

二十三歳から二十五六歳、大学にも専門学校にも縁のなかつた私には、同じ学校につながる同年輩の友人というものが全くなかつた。今でもそれを幾らかの恨みのように考へる事もあるが、もしもそういう友人達があつたと

したら、果たして私が現在のおのれのようであり得たかどうかは頗る疑わしい。やはり私はこのような現在が好きだ。そしてその種の友人の代りに、若年の私には私淑の末にちかしくなつた数人のすぐれた先輩があつた。高村光太郎、武者小路実篤、長与善郎、小泉鉄、千家元麿。すなわち『白樺』の正統とそれに近縁の人々とであつた。

そしてこの人々の仕事と意欲と独特な生活雰囲気とへの熱烈な傾倒が、否むしろ燃えるような信仰が、ほとんど私のその後の運命を決定したと言えるだろう。その私を、その当時から現在までずっと見ているのは高村光太郎さんである。

彫刻とか詩とか、ロダンとかヴェルアーラ

ンとかを、まだ部屋住みの角帯をしめた私に

教えてくれた高村さんを言うのではない。それはそれとして充分ありがたい又なつかしい思い出ではあるが、私の思慕の情は生れて初めて見たその「まるごとの人間」に注がれた。今多くの若い人達が説明しがたい思いで高村さんを慕つてゐる消息がそれに近いかも知れぬ。然しそのころの高村さんは若かつた。西

歐的知性をからだ全体にたきこめたばかりの高村さんは、物質的にも精神的にも惚れぼれするような佳い匂いがしてゐた。薰陶とはこういう事を言うのであろうか。私は吸收し、

陶酔し、下町商家の子弟から変質して行つた。土性骨まで鍛え抜かれなかつたのは惜しまれるが、その匂いは今でも心身の何處かに残つてゐる気がする。

詩集『道程』が初めて出た時、私の務めていた会社へ訪ねて来られて、大玄関の石段の上で、あの和服の大きなふところからそれを取り出して渡して呉れられた時の眩暈のするような感動は、死ぬまで決して忘れる事はないだろう。

詩はその高村さんと千家さんとの私淑から学び、武者小路さんや長与さんから声援されていよいよ本気になつて書き出したのだが、ある時武者小路さんに向つて、思いあまつた氣持で「こうやつて続けていたら、いつかは高村さんや千家さんのようになれるでしょう」と聞いたら『彼が三十の時』を出版して「そうしたら高村や千家でなく尾崎喜八に

なれるよ!」と言つた。

ゲーテはたしかエッケルマンに、自分の今日あるはその十分の九を他人に、そしてわずか十分の一を自分の天分に負うてゐるといふ意味の事を言つた。あのゲーテにしてこの言葉があるならば、私などは何と言つたらいいのであろうか。与えられたところ頗る多くて、報いるところはなはだ少いのを恥ずるばかりである。

(亀井勝一郎編『わが青春記』三笠新書 昭和三十年八月十日)に収録)

千家の詩の味ひは、いつも其の大いなる無邪気と、粗野と、純朴と、涙もろい愛情と、そして清新な感受性とを搔きませて、其処から沸して来る彼独特の表現の内に存してゐる。

日本詩人

大正12年8月

凡そ此等の要素はすべて千家の本質を形作るものである。しかも此等の要素たる、しかく容易に恵まれるものではない。この点、詩人千家は幸福である。彼は、彼として無くて叶はぬものを皆確かに持つてゐる。

凡そ現今の詩人のうち、千家程単純で又無技巧な詩を書く者ははない。これは彼のもの、賞讀者批難者を通じて等しく認めるところである。即ち人は其の単純と無技巧との内に汲みつくせぬ美を見て彼の詩を愛し、又人はその単純と無技巧に懐らすして彼の詩を批難する。實に彼はその思想と表現とに於て些かの象徴の芳香さへ無く、隱微の反映すらなく、平明坦々、白日の中の道のやうだとされてゐる。そして彼自身でさへ詩集「炎天」の序で云つてゐる。「俺の詩は幼稚だ。だが幼稚の中に何か閃めきがあるだらう」と。

現今、殊に最近、我国の詩はその内容に於て、その色彩、官覚に於て、その形式に於て、漸次に複雑、豊麗、自由の度を加へつゝある。その多音多彩の傾向は日に月に熟しつゝある。人はその光輝と響との前に眩暈し、その多角度と莊麗とのために酩酊してゐる。

この雰囲気の中にあつて千家の詩は確かに孤独である。

彼が自ら称して「幼稚」だとするのは、この多音多彩の性質を、彼自身の作品が持つてゐない事を自覚してゐるがためである。この自覚は近來殊に強く彼の内に目醒めて来たやうに私は思ふ。そして此れは必然の事に屬するかも知れない。もしも彼の内心の要求が、

自らも其等の光彩を取り入れ、其等の音響は使ひたいと望むならば其れも悪くはない。しかし若しも彼がその為に少しでも迷つたり自信を失つたりする事があるとすれば、此の自觉は却つて毒である。自觉は自己の生長のためにのみ役に立つ。自觉が彼みづからを凋ます事の役に立つやうな事でもあれば、其れは悲しむべきである。

千家は一箇の明白なる人格である。少くとも芸術家としての彼は凡そ陰影を持たぬ者である。彼は内に光を保つ玉よりも、数百の刻み目から光を反射する金剛石に似てゐる。彼は月光を収斂して露をしたゝらす水晶ではなくして、あらゆる面から虹を放射する多角の石である。彼は己れを感じさせた対象を、内に長く藏してゐるに堪へない。彼は堆積した材料を選択し組み合せ、自己の魂の姿に変形して、それに百炼の堅さ、錦繡の美を与へるやうな仕事に馴れない。彼の頭脳のレンズは感光すること速く、放射することも亦速い。その授受の間に彼は彼独特の仕事をする。眞の光の射す空地の隅にも魂を寄せ、暗い樹陰の蝶々にも精神の飛躍の翼を与へる仕事である。主題は余りに多く、作業は余りに速い。彼の多作はこゝに確乎たる理由を持つ。曾て彼はその無限の生産の悦びを詩に書いた。

ゴオホの素描に「噴水」と云ふのがある。

私は千家の詩を、よくあの絵と思ひ較べる。其は鋭い管の尖端から真直ぐに虚空を切つて噴き上げてゐる。何等の余韻も、何等の低徊も、何等の説明もない。しかもあるの「勢ひ」がゴオホの表現しやうとした美であった。あの素晴らしい水の強い束が。

しかし勿論一方で、私は他の種類の詩人、即ち芸術の上で「複雑な経験のオーケストレーション」、「近代生活の種々相の綜合及び組織化」を志す人々に同感を持ち、その努力に敬意を表する。そして敢て云ふならば私も其の一人である。此處では光景がすべて變つて来る。此處では哲學も科学も、社会批判も各種の主義、運動も、凡そ現代の文化的な生活の種々の要素諸々の機關が、審美的の燎然たる電光の

しかし勿論一方で、私は他の種類の詩人、即ち芸術の上で「複雑な経験のオーケストレーション」、「近代生活の種々相の綜合及び組織化」を志す人々に同感を持ち、その努力に敬意を表する。そして敢て云ふならば私も其の一人である。此處では光景がすべて變つて来る。此處では哲學も科学も、社会批判も各種の主義、運動も、凡そ現代の文化的な生活の種々の要素諸々の機關が、審美的の燎然たる電光の

下で検討され処理される。最早フォーカスは

随所に汗ばみ熱して、全体の光景は新らしい渾沌世界である。今は「美」にさへも近代的苦悶の陰影がある。そして此の窒息するやうな濛々とした熱氣と明るさとの中で、人は悩み、鬪ひ、且つ誇り、満足してゐるのである。

以上の叙述に多少の誇張はあつても、兎に角、形勢は其のやうである。

斯かる生き方を要求し慾望する者にとつて、千家の単純な主題、その反射的芸術、スケッチ風とも見れば見られる表現法は、余りに端的に、余りに一本調子に、且つ余りに智的でなく見えるかも知れない。近代生活の妙趣、含蓄を求める者にとつて、千家の詩は確かによく報ふはしないであらう。それは余りにむきだしで、所謂覆はれたる種々の美の妙味を感じしめる事がないであらう。又主題から云つても余りにブリーフな物のみ多く、一箇の作品は常に簡単なモチーヴばかりで、其処から転位し進出するコントラップンクト的な、又フレグ的な、如何なる変化の妙をも味はふ事が無いであらう。余りに智的な分子に乏しく、余りに衝動的な質にのみ生きてゐると感じるであらう。

この「感じ」は感じとして本当である。美

をユニワーサルな世界に求める者にとつて、時に余りに甚しく雑記帳の下書き的、感想的断片的である千家の詩には、或は首肯し兼ねる事もあるであらう。

なるほど、一切の美が渾然と飽和して、しかも其れが高貴な想に貫かれてゐる時、そ

れは確かに理想的な境地である。

しかし早やまつてはいけない。詩壇は未だそこまでは往つてゐないのである。そして私の見る處では寧ろ漸く、内容よりも形式、魂よりも姿態の方へ心を奪はれつゝあるやうである。又一方では其の無趣味な事、常識から一步も出ないものさへある。

此の状態は一つの危機とも云へる。

健全たらうとすれば慷慨悲歌する書生となり、美ならんとすれば忽ち人itaraiアルチシェル工樂園の住民となる。

たゞ此れが詩壇全体の傾向ではないとしても、兎も角、確信無き者をして迷はしめる時代である。

かかる時代にあつて一人の千家を持つ事は頼もし。純粹の芸術的見地を離れて道義上の理由から見ても、この無垢純真な、この破格的な、しかも其の表現の美に於て独特の魂の光を持つ千家を持つ事は、確かに我等の悦び、我等の希望でなければならない。

以下極めて簡単にではあるが、彼の詩の持つ美的特質を挙げて見やう。私はその例証をすべて彼の最近の詩集「炎天」の各頁から取る。それは「陰気な蝶」と云ふ短かい詩である。

人が行けば冷えびえと飛びめぐり

真昼の森の静かさが
膚寒く身に沁みる

此の僅か九行の詩が、何と云ふ不思議な美しさ、何と云ふ真実さを持つてゐる事だらう。比較を余り好まぬが、私は此等の詩に我が萩原朔太郎君のものと同じ境地を認める。そして千家があのいつもの太陽的なものを捨て、鬼火のやうに燃える時、彼が如何にその本質に於て萩原君と相通じてゐるかを私は見るのである。そして此の傾向は同時に彼の詩の主的な部分を形作るものである。

今夜の空は重さうだ

月は虧けて

古い時に朽ちて壊れてゐるやうに
奇異な姿をしてゐる

傷つき、雨風に曝されても

尚輝いてゐる月だ

廃滅したロマンチックな

春の夢を見てゐる月

雲がもの凄く痛ましい月の前後に
死んだやうに静かに横はつてゐる

「今夜の空」

注意すべき事は、彼の此の種の詩情が生き生きとして来るのは、多くの場合夕暮とか夜とか、兎に角暗い陰気な環境に於てである。

例証は幾らでもあるが、次には彼の持つ最も独特なもの、その優しい愛情に就て例を引

いきれをこめた木下間を行くと
陰気なところの好きな
紅や朽葉色の蝶々が

木々の吐く蜜に酔つて
節くれた幹に何羽も何羽もとまり
幹をめぐつたり、じりじり登つたりしてゐる
かう。

もう嫁を貰つてもいゝ位の息子と

老いたる母と一緒に歩いてゐるのを見ると
俺は羨ましい

母が幸福さうなを感じる

さうして嫁をもらつても

息子よ、お母さんに深切にしてあげると頼
みたくなる

人前の故か、それとももう息子は

母の愛より、外を求めてか

ちつとばかり冷淡に見えるのは
人前を裝つてるのであつてくれ、ばい、と思ふ

「母と憩ふ」

二人の印度人が

公園の草原に坐つて

何か口論をしてゐた。

一人の小さい方は泣いてゐる

大男は中折を冠つて

金指輪を嵌めた皮のやうな黒い手に
巻煙草をはさんで

白い歯を露き出して紫色の脣をふるはして
怒つてゐる。

その獰猛な顔はゴリラそつくりだつた。
小さい方は静かに泣いてゐた

もう争はうともしないで

彼は大男の膝の側に置いた

瓶を包んだ桃色と青を染め分けた絹ハンカ
チーフをとつて

そつと眼を拭つてゐた。

哀れなインデアンよ
私にはおまへの子供の時が思はれる

おまへの母は国でおまへを案じてるかも知
れない

国へかへれ。母のところへ。

おまへは未だ乳臭い子供だ。

卑劣で不正の多い世界の海を

渡り歩くのは辛いだらう

人の善ささうなされてゐないインデアンよ

その恐ろしいゴリラのやうな大男は

いつもおまへの苛酷で狡くて、おまへをだ
ましては働いた金を捲き上げるのだらう

「二人の印度人」

畠から吹いて来る
涼しい風に吹かれながら
私は古い田舎家の
開け放つた室で昼寝をする

此の二篇に流れてゐる彼の優しい愛情。こ
れは最早や理屈ではどうする事も出来ない。

人の心に迫る此の純粹な愛情と斯かる表現と
を拒む事は、我等の中心の人間らしい善と慈

しみとの感情を拒む事である。そして此等の
主題に最も深く心を動かす詩人として、我等

は千家の存在を祝福し尊重しなければならな
い。そして実に何等の技巧なしに、しかも到

底他人の企て及ばぬ愛情の表現をする事の出
来る詩人は、千家を措て他に其の比類を見な
い程である。

次に彼の大部の作品を占める、自然に対
する驚異と其の讃美とを見やう。彼の精神の
健康性を現はすものは此の部類に属する詩で
ある。又彼の独特的な觀察が生き生きと飛躍し
滲透してゐるのも此等の作品である。たとへ
彼の本質的な陰気さ、憂鬱さが、時には其の

光明の中に一抹の雲影を落とす事があるとし
ても、彼の最も悦ばしい歌、私の最も愛して
用ふる鍵が其處にある。

海はまつさをに輝いてゐる
海の上には空がないやうだ
海は充実した熱情を湛へて
奔放な美を空に吐いてゐる
貝殻のやうな帆が白い翼を浮べてゐる

「小景」

實に此の僅か五行から成る「海」の詩など

は、千家の此の種の作風の代表的なものである。そして凄い程実感の力で躍つてゐる、私は此の様な作品を見る時、眞に千家は鬼才だと思ふ。此處に挙げるには長が過ぎるので割愛するが、今年八月号の「白樺」に出た彼の「夏の海村」も、その素晴らしい表現に於て此れを凌ぐ程のものである。彼が夢中になつて來ると其の描写の奔放自在を極めてゐる事、時に往々惡魔を思はせるものがある。

私は多少の相違を除くと、彼を作曲家ベル

リオにも近い詩人だと思ふ。その性情の優しさに於て、その作風の不敵さに於て、その陰氣な資質と孤独さに於て、又多く彼のボヘミアン的傾向に於て。

彼は寂しい彗星を思はせる。彼にして最も堅固な意志の力を備へたら、その未来は更に燐然たる軌道の上に確定されるであらう。私は我国の芸術のためにも、彼の不惑の信念と、動搖なき生活とを願はずにはゐられない。しかし一切に拘らず彼は日本の生んだ一箇の天才である。たゞ多くの内面的矛盾が、又稀には其の意志と智慧との不足が彼を悩ませ傷けやうとも、そこから噴出する彼の藝術は我等の悦び、我等の愛そして我等への善き刺戟である。彼は常に、未だ曾て見なかつた熱情そのもの、美を我等の前に掘り出して来る。それは神祕の光を放ち、又不思議に澄済と生きてゐる。それは何等の仲介なしに彼の魂をむきだしに我等に語る。そして此のゴホ的な特質ある美は、我等の世界にどうして

も一つは無くてならぬものである。

千家は多くの愛読者を持つてゐる。それは祝すべき事だ。しかし世間の愛は未だ充分其に価するだけ報ゐてないやうに見える。

我等の温かい理解を拡げやう。そして彼を歓迎するにもつと多数の心を以てしやう。凡そ斯かる建設の時代にあつて、一人でも多くの天才者を認める事は我等の悦びであると共に我等の義務なのである。

Aimer avec ferveur sho-même en tous les autres

Qui s'exaltent de même en de mêmes combats

Vers le même avenir dont on entend le pas—E. Verhaeren

明治二十二年六月に生れた千家元麿は、昭和二十二年三月六十一歳でその生涯を終つた。しかし詩人としての彼の仕事は三十歳から四十歳ぐらゐまでの間にその最も盛りの花期を咲き切つて、それ以後は年を逐つて次第に衰へしほんで行つたやうに思はれる。

昨日は去つても

又新らしく生れる

不死鳥のやうに

火焔の中から蘇る

神々しい望みを心に燃やし、消えなんとするそれを搔き立てながら、しかも襲ひ来る身心の深い疲労と生活の索寞とをどうする事もできず、移る世代の足音と、目まぐるしい詩的潮流の変遷のなか、枯野に夢をかけめぐらせる焦燥と孤独とのうちに、世にも稀なあの無私と熱中と善意との詩人の姿を、踉蹌と遠く淋しく没して行つたことは限りなく痛ましい。

おそらくはその敬愛してやまなかつたウオルト・ホイットマンのやうに、彼もまた悠然と永生きをして、豊かな自得と円熟とに暖か

解説

新潮文庫 千家元麿詩集

昭和28年11月刊

く横たはる夕日の野に、彼自身の「草の葉」を晴れやかに広々と波打たせたかつたことを。しかし我等の詩人千家元麿は、その芸術家としての資質においても、また人間としての天性においても、ホイットマンやユーロー、よりも寧ろ一層ヴァン・ゴッホに、ヘルダーリーンに、或はフーゴー・ヴォルフに近かつた。彼等は靈感の太陽や星々にみちた短かい夏の日毎夜毎を、創造の熱に憑かれたやうに赫耀と生き深めた。そして突然狂気が、精神の闇のとばりが彼等に落ちた。彼等の絶美な歌のしらべはそのまゝ、天に残つたが、打ち砕かれた魂の琴は生ける屍として地にうごめいた。そして魅せられた魂の戯曲も其處に終つた。

われわれの千家は狂死こそしなかつたが、詩に生きる者に詩の泉が涸れ、ば残りの生は沙漠にもひとしい。彼は荒涼とした不毛と貧困の中に一掬の水を求めた。しかし悲しいかな靈感の清冽な水は涸渴してゐた。彼は駄のやうに、おのが身内の貯への水で燃える渴望を医やさうとした。しかしその水は惰性的やうになまぬるく、過去の記憶の残杯は嘔吐を催させた。彼はみづから傷つけて我と我が血を啜つた。そしてつひに力尽きて打ち倒れた。

とはいへ彼の三十代が、なんといふ新らしい発見と創造との十年だつたらう！ わけても「自分は見た」「虹」「野天の光り」に充実した最初の幾年が、なんといふ目ざましい豊饒の夏だつたらう！ その処女詩集はまさしく

く新星の出現だつた。或る天体との接触に会ふやにはかに烈しい爆発を起こして、爛々と一大光輝を放つて燃えるあの新星の出現だつた。当時の詩の天空の一角に輝いたその極大光度の壯觀は、ながく文献の上に残つて思ひ出されたり想望されたりするに違ひない。

略伝によると、彼は明治二十一年六月八日旧東京市の麹町区で生れた。父は男爵千家尊福、東京府知事や司法大臣に任じた人である。

出雲大社に關係の深い千家氏には相違ないが、詳しいことは私は知らない。実母は小川氏豊子で、日本画をよくしたと言はれる。古い由緒ある家柄の子として生れ、派手な社交に明け暮れる政治家の家に育ちながら、彼は後年にいたるまで、上流子弟の自意識につきまとはれたり、況んやそれに毒されたりはしなかつた。外から見たよりも内に苦しく、日常生活のしつとりした落ちつきや親密さを欠いてゐたらし複雑な家庭の空氣のなかで、彼はむしろ陰鬱な偏執者、孤独で空想的な異端児をもつて目されてゐたかも知れない。学校は麻布小学校から慶應義塾幼稚舎、ついでその普通部から東京府立第四中学校へ、そして最後に盛岡の中学へと転々した。おそらく勉強はあまり好きでなく、規則に縛られることも極度に嫌ひで、従つて成績・素行共に親や教師達の期待に添はないものであつたらう。そ

れにしても友達数人と語らつて家を飛び出し、ハワイへの渡航を企てて失敗したといふ一つの逸話は、少年千家を想像する事のできる者には、いかにも有りさうな事だとは、ゑまれる。たぶん「十五少年漂流記」風の冒險物語に夢中になつた結果であらう。私などもそんな空想を燃やした覚えが無くはない。たゞ下町の家庭の「お母さん子」には、いろいろな点で必要な条件が欠けていた……。

しかしあした彼も、芸術に関する讀書は好きで、早熟な文才は早くから鋒銳を現してゐたに違ひない。略伝は彼が十七歳の頃から当時の電報新聞や万朝報に、俳句や短歌や詩の投書をしてゐた事を知らせてゐる。後年一家を成した文人の中には投書の経験を持つてゐる人が意外に多いが、實に彼もその一人だつたのである。われわれの千家元麿に投書家時代があつたといふ事は一見奇異の感が無いでもないが、後の白権派の人達のやうな仲間をまだ持たず、同人雑誌や、独学者を親切に指導するやうな本もまだ少く、そのうへ一面庶民的なものを多分に持つてゐた彼にとつては、至つて自然な成行であつたやうにも思はれる。やがて短歌では窪田空穂に、俳句ではサトウ・ハチローの父紅緑に師事して、号を銀箭峰或は暮郎と称したと伝へられるが、そのいづれも、今にして思へば、彼の飄逸の一面を現す号としてほゝゑまるのである。最後の著「蒼海詩集」には俳句と短歌とが採録されてゐるから、晩年には彼としても昔の空を懷かしんだかと思はれる。

私が彼を新星にたとへて或る天体との接触を云々したのは、決して單なる修辞の上の綾ではない。人道主義的理想主義と、広闊で新

鮮な芸術上の世界的視野の明るさとに鼓舞された一群の青年文士によつて創められた文学美術雑誌「白樺」こそ、實に彼千家元麿といふ暗星が接触した星雲だつた。そしてその星雲の中の一つの星——當時まだ無名だつた後年の巨星——武者小路実篤が、まづ最も強く彼を引きつけ、又彼に引きつけられた。「人間万歳」や「真理先生」の著者は、「千家元麿に就いて」といふ文章の中で其の頃の事をかう書いてゐる。

「千家元麿を僕が知つたのは僕が二十七八、千家が二十四五の時と思ふ。(中略) 僕が『世間知らず』を出した時、変名ではあつたが、新聞のやうな雑誌を出して、その紙上で『世間知らず』の合評をしてくれ、その中でも一番ほめてくれたのが千家だつた。この合評を読んで僕以上に喜んで、千家に厚意を持つたのが岸田劉生だつた。まもなく長与善郎、岸田、千家と僕とは大の仲よしになつた。しかし千家はそれから暫く、何もかけなかつた。あせつてはゐたが、かけなかつた。かけなかつたが、僕達は千家に厚意を持つて、今に何とかくだらうと思つてゐた。其處に突如として『車の音』その他五六篇の詩が出来た。その詩を読んで僕はすつかり感激し、又喜んだ。こんな情熱がさながらにリズムにのつてかかる男は日本には居ないと思つた。僕にはとても書けない調子が出てゐると思つた。それで僕は千家の詩を大いに賞めた。千家も喜び、千家のお父さんの尊福さんも喜んだと聞いた。(中略) それから千家は詩人として日本に類の

ない調子の高い詩をつゞけて発表し、それが集められて『自分は見た』と言ふ詩集が出来たわけだ。當時若かつた僕はこの詩集を日本の一の詩集と思ひ、又さう公言した。反感を感じた人もあるたかと思ふが、僕は今でもさう思つてゐる。岸田劉生が表紙をかいたが、それも中々い、装幀だつた

この処女詩集『自分は見た』は大正七年五月、彼が数へ年三十一歳の時に出たが、それを推挙したのは武者小路実篤その人だつたといふ事である。実際詩人千家元麿は「白樺」によつておのれに目ざめ、なかんづく武者小路、長与、岸田劉生等との親交によつて駿馬の驥足を展ばすに至つたと言つても過言ではないであらう。もとより能く与へられる者はまた能く与へる者でもあつて、武者小路・岸田といふやうな良き伯樂を得て躍り出でた千家の矢継早な作品発表と旺盛な詩作力とは彼等を喜ばせ、感激させ、刺戟したには相違ないが、それでも彼は當時やうやく擡頭してそれぞれ流派の形をなしつつ、あつた民衆詩派、感情詩派、乃至は正統をもつて任する高踏的な詩派等々の雑然と相隣る野から一人離れて、武者小路の所謂「大の仲よし」の雰囲気のなか、その純粹と奔放と、情愛に濡れた睫毛や瞳を珍重されながら、もつぱら風薫る貴族的な白樺の牧でみづから養つてゐたのである。

かうして千家元麿は、多くは東京北部の郊外、都會と田舎とが接觸して一種独特な庶民的生活景觀とメランコリックな雰囲気とを持つ巣鴨・池袋のあたりを、妻子をかへて転々と借家住ひしながら、その割期的な「自分は見た」以後、「虹」「野天の光り」等十冊の詩集に加へて、二冊の短篇と戯曲の集、一冊の隨想集を次々と出版させた。此の間頭に変

見、細紋のわづらはしきを忘れしめる程の溺没と醉との深さ、腹の底からの天才への傾倒と自然讚美、幼い者・弱い者・貧しい者への切々たる愛情等、幾多未前の特質を示した当の千家にも拘らず、私としては「自分は見た」が必ずしも「日本一の詩集」だとは思はない。況んやいかほど彼を敬愛してゐるとはいへ、「他の人の詩は千家のに並べるとつくりもの気がする」などとは決して思はない。率直に言つて、「白樺」の人達はあまり詩を読まなかつた。たゞ千家の詩が、千家への愛と信用とだけが例外だつた。臥榻のかたはら他人の鼾睡をゆるさずである。ところで、本当の事を言へば、詩人は詩人によつてしか読まれないのである。音樂家が音樂家によつてしか聴かれないやうに。あとは読者であり聴衆であつて、その人達は權威ありげな批評家や通人の言に唯々として左右されるのである。若しもさうでなく、公平にして普遍に通ずる見解を持つて動かされぬ人があつたとしたら、それは既に読むこと或は聴くことの達人である。

かうして千家元麿は、多くは東京北部の郊外、都會と田舎とが接觸して一種独特な庶民的生活景觀とメランコリックな雰囲気とを持つ巣鴨・池袋のあたりを、妻子をかへて転々と借家住ひしながら、その割期的な「自分は見た」以後、「虹」「野天の光り」等十冊の詩集に加へて、二冊の短篇と戯曲の集、一冊の隨想集を次々と出版させた。此の間頭に変

たらしいが、私はたゞ人の噂に聞いたのみで詳しいことは全く知らない、やがて第二世界大戦がはじまって、昭和十九年に長男宏がビルマで戦死、翌年三月糟糠の妻千代子が疎開先の埼玉県入間郡吾野あじので病没した。此の本の巻末を飾る「燐花詩集」中の「三月」と、割愛はしたがその「彷徨」とは、いづれも永の年月人生の明暗苦楽を共にした亡き妻への、真に惻々と胸迫るやうな哀歌である。

其の後彼は東京都豊島区長崎の寓居に移つて、ひとり寂しく詩をつくり、又早くから好きだつた画をかく事に専念してゐたが、終戦後三年の昭和二十三年三月十四日、感冒に原因する気管支肺炎で病死した。享年六十一歳。遺骨は先立つた妻のそれと共に、郷国島根県大社町の千家家墓所にをさめられた。墓碑の文字は生前最も親しかつた武者小路実篤の筆だといふ。遺族は次男潔とその妻とである。

千家元麿は短篇小説も書き戯曲も書いたが、それらは所謂「白樺」の仲間から受けた刺戟の反射作用で、詩こそは彼の本領だつた。元来が直感的で性急で、ひたすら衝動に身をまかせ、感激にも早ければ讃美や流涕にもまた早く、常に特異な詩的獲物をねらひながら、ぶるぶると熱っぽく身を震はせるた彼には、小説家や戯曲作家に無くてはならぬ構成の勘案、均衡の意識、緩急の操作、持続の能力が欠けてゐた。結末を絞るために先づ発端を述べる煩はしさなどは、到底彼のよく耐へ得るところでなかつた。單刀直入、彼はいきなり

り中身なかみを襲つた。その中身を中身たらしめてゐる関係周囲、その微妙な聯動装置などはどうでもよかつた。長い場合も短い場合も、彼の音楽はいつでも単旋律だつた。そしていつも基音が打たれた。陪音が一緒に鳴れば鳴るでよかつたが、それは聴き手に任された。或は良い聴き手がそれを聴きわけた。だから彼の作品はおほむねトルソか、頭部や手足そのものの断片だつた。従つて完全に把握され、完全に彼自身の物となつた作品はすばらしく、さうでないものは凡作だつた。しかし其の凡作といへども素材に対する第一着眼はいいので、彼にしてなほ一層の凝視、なほ一層の肉迫の努力を惜まなければ、優に一箇の傑作となり得るもののが少くなかった。たゞさういふ場合、芸術家のみが知つてゐる生き甲斐ある困難と闘ふかはりに、やゝもすれば既成の安易な観念で片づけてしまふ素朴で軽信家の彼には、必要な執着心と辛抱強さとが欠けてゐた。又さまざま試薬を使つての反応実験と、その過程における苦心の味や操作そのものから来る無限の興趣。さういふ事も多く彼のあづかり知らないところだつた。その最善の時にはセザンヌよりも寧ろゴッホ、マラルメやヴァレリーよりも即興詩機会詩におけるホイットマン、直感的な第一感銘と速筆速写、冷却しない間の熱鉄の鍛錬。およそかういふのが彼の詩法のアルファでもあればオメガでもあつた。

彼の親友長与善郎が「詩仙元麿の詩集に序す」といふ文章の中で書いてゐる「千家の詩

は素朴すぎるかも知れない。僕も時にさう思ふことがある。もし、詩人とは正しく平仄にかなひ、調よく韻踏む技巧に於て巧みな者をさすのであれば千家は決して優れた詩人ではない。しかしもし詩人とは満身詩情と詩魂とで固まつた者を指すのだとすれば千家は実際に生れながらの詩人であり、又眞の詩人が彼のやうな人間のことでは云ふまでもない。烈しい印象と強い実感にせき立てられる彼には、さういふ修飾に浮き身をやつしてゐる余裕はなかつた」といふ一節も、また「時に言葉を惜しむことを忘れたと思ふものもないとは言へないが、情熱が高まつて制しきれないでかいたものには、他の人にかけない調子の高さがあり、それはつくられたものではなく生れたものである」といふ武者小路実篤の言葉と共に、千家の詩の自然発生的な情熱の美と無意識美とを礼讃したものであらう。

るための修飾に身を削ることの好箇の例と言はなくてはならない。詩人も亦たつた一つの適切な形容詞、たつた一つの生き生きした動詞を発見するために、一時間、「一つの午後」を、乃至数日をさへ捧げる事があるのである。

理解される事によつて使命を終る散文とは違つて、その使命が、言葉の種々の機能によつて読者の陶酔や興奮を創造することにある詩といふ藝術を仕事とする人間は。

また「情熱が高まつて制し切れない」といふ状態は、正しく言へば、現前の事物或は心内のイメージから惹き起された詩的情緒が、美的興奮が、言葉による再現の突破口を求めてひしめき立つてゐる渾沌の姿を指してゐるのである。然しこれはあくまでも、其處から一つの芸術が始まるところの衝動であり動機であつて、その謂は「生理的動物的な情熱や興奮は、再現作業の持続中に詩人が経験する創作的智的興奮とは峻別されなければならぬ。」そして一方では最初の純粹な感動を維持しながら、他方これを第三者にさながらに感情移入しようとしてさまざま可能な手段を講じることが詩人のする作業であつて、此の「作業」といふ心の落ちつきと頭脳の明知とを併せ要する技術駆使の過程そのものの中に、詩人の苦心も喜びも存するのである。

「満身詩情詩魂に固まつて」ゐる事は詩人にとつての第一資格に相違ないが、それだけでまだ詩人とは言はれない。ちやうど満身恋愛感情に固まつた人妻が直ちに良い母ではないやうに。詩人もまた生み、育て、薰陶する

苦みと喜びとを味はふのである。そして成人した子等を放ち遣る。必ずしも彼等によつて適切な形容詞、たつた一つの生き生きした動詞を発見するために、期待せずに……

千家元麿の詩業のあとを辿つて見ると、その流れは初めに太く終りに細くなつてゐる。

それは単に作品の量においてのみでなく、質においても亦さうである。彼は数年の間にその持てるすべてを蕩尽し、其の後は惰性か、稀におとづれる靈感か、或は過去の作品の残響によつて書いてゐたやうに思はれる。おそらく病氣のための空白や、予後の肉体的精神的疲労や衰退が影響したのであらう。それ

にしても彼は早くから吐き出すのに急で、攝取するのにおろそかだつたのではないだらうか。又たゞ攝取したとしてもあまりに自己流に早呑みこみで、且つその栄養の対象があまりに当時の「白樺」的なものに限られてゐたのではないだらうか。彼の作品には他からきびしい批判といふものが向けられなかつた。純粹で素朴で恬淡で恥づかしり屋で、常に同情と愛とにせつなく満たされてゐた此の善人、此の巷と原野の歌の天使を温かく囲むものに、少數の有力な作家や画家の一団があり、ひたむきに彼に心酔する一群の若い詩人達があつた。それはまことに幸福なことは違ひなかつたが、他山の石、口に苦がい良薬を手にしなかつたことは、芸術家としての彼にとつて真に惜むべき事でなくてはならない。

私はよく思ふのだが、もしも彼が「自分は見た」や「虹」や「野天の光り」等に示した意慾と、力量と、特色とを更に深く広々と押し進めて行つたならば、どんなすばらしい詩芸術の一天地が新らしく我国に出現したことだらう。其の畢世の作の合本はおそらく日本の「草の葉」とも言ふべきものになつたら、そして或は重たく堂々たる大冊に仕立てられ、或は軽い手丈夫な袖珍本に製本され、広く永く人々に愛され讀まれたことだらう。実際彼の詩の本質はさう成つて然るべきものであり、専門の士を動かすと同時に、大衆の心をもつかむ力を持つてゐるからである。私はあの「車の音」「野球」「村の郵便配達」のやうな、貧しい庶民的な人々への人間愛と共感とから、対象を偉大なものにまで聳え立たせる彼の正しく、健康で、圧倒的な作品をどんなに好きだらう。これこそ真にホイットマン、ミレー、ゴッホに心酔してやまなかつた詩人の作品である。又あの「白鳥の悲しみ」「象」「蛇」のやうな、実相観入の驚嘆すべき深さまで達した作品をどんなに愛するだらう。これらもまた彼の傾倒したゴッホに通じる道であると同時に、彼のつひに口にしなかつたライナア・マリア・リルケの、その「物の詩」の真諦にも脈絡するものである。わけても「象」の一篇はその美まつたく比類なく、千家元麿一代の傑作と言つていいだらうと私は思ふ。

すべて此のやうな作品は彼の在世当時すでに独特なものであつたし、今後も永く独特である事をやめないだらう。彼の死はまことに

惜しく、その半途での罹病と疲弊とは一層惜しい。彼にはもつと摂生と、視野の拡大と、一筋の道への執着心と、独往の気魄とが願はしかつた。私が此の詩集の編纂をよろこんで引き受けたのも、一つには彼千家元麿への讃嘆と哀惜との故にほかならない。

(一九五三年六月)

新潮社 日本詩人全集 12

昭和44年1月刊

縛られる事を極度に嫌っていたと言うから、成績・操行共に両親や教師達の期待には多く添わなかつたろうと思われる。しかしその天性は善良で美しく、情にもろく、一方藝術への愛も熾烈で、早熟な文才と画才は若年の頃からその鋒鋩を現していた。生前の詩集十巻、遺作詩集一巻、死後集められた詩約一巻、長篇の叙事詩一篇、小説二篇、更に詩・美術・外国文学に関する隨想数篇などを数えれば、その業績の大きく且つ多彩なことが思われる。しかし若しも彼がなお十年二十年を生きて、その仕事の筆が断たれなかつたら、そこからどんなに一層円熟した、どんなに美しく老成した作品が生れただらうと思つて、謂わば「早死に」が惜まれるのである。

昨日は去つても

また新らしく生れる

不死鳥のやうに

火焔の中から蘇る

ある。『自分は見た』は、大正七年五月、三十歳の時に出たが、それを率先して推挙したのは武者小路実篤だつた。實際、詩人千家元麿は雑誌『白樺』によつておのれに目ざめ、わけても武者小路、長与善郎、岸田劉生らとの親交によつて駿馬の驥足を展ばすに至つたと言つても過言ではあるまい。元より能く与える者はまた能く与えられる者でもあつて、武者小路、岸田と、いうようなすぐれた同僚を得て躍り出た千家の矢継ぎ早な作品発表と旺盛な詩作力とは彼らを驚かせ、喜ばせ、刺激したには相違ないが、それにして、彼は当時ようやく擡頭してそれぞれの流派を形成しつつあつた感情詩派、民衆詩派、乃至は正統をもつてみずから任じる高踏的な詩派等々の雑然と相隣る野から一人離れて、武者小路らの『白樺』的霧囲気のなか、その純粹と奔放と、情愛に濡れた睫毛や眸を珍重されながら、もつぱら風薫る貴族的・人道主義的な牧場でのれを養つていたのである。

こうした熱烈な願望を心に燃やし、消えなんとするそれを懸命に搔き立てていた詩人千家元麿が、ようやく襲つて来る心身の深い疲労と生活の索寞とをどうする事もできず、移る世代の足音と目まぐるしい芸術的思潮の変遷のなか、枯野に夢を馳せめぐらす焦燥と孤独のうちに、世にも稀なあの無私と熱中と愛の詩人の姿を、蹠蹠と遠く寂しく消して行ったことは限りもなく痛ましい。

千家元麿は明治二十一年(一八八八年)六月八日、男爵千家尊福の子として生れ、昭和二十三年(一九四八年)三月十四日に六十歳で他界した。生来孤独を愛する異端児で、小・中学校での学業を余り好まず、規則に束

千家元麿・人と作品

彼の処女詩集で又その最もすぐれた詩集で

*
もある『自分は見た』は、大正七年五月、三十歳の時に出たが、それを率先して推挙したのは武者小路実篤だつた。實際、詩人千家元麿は雑誌『白樺』によつておのれに目ざめ、わけても武者小路、長与善郎、岸田劉生らとの親交によつて駿馬の驥足を展ばすに至つたと言つても過言ではあるまい。元より能く与える者はまた能く与えられる者でもあつて、武者小路、岸田と、いうようなすぐれた同僚を得て躍り出た千家の矢継ぎ早な作品発表と旺盛な詩作力とは彼らを驚かせ、喜ばせ、刺激したには相違ないが、それにして、彼は当時ようやく擡頭してそれぞれの流派を形成しつつあつた感情詩派、民衆詩派、乃至は正統をもつてみずから任じる高踏的な詩派等々の雑然と相隣る野から一人離れて、武者小路らの『白樺』的霧囲気のなか、その純粹と奔放と、情愛に濡れた睫毛や眸を珍重されながら、もつぱら風薫る貴族的・人道主義的な牧場でのれを養つていたのである。

彼はたびたび居を変えたが、多くは東京北部の郊外、都市と田園とが接觸して一種独特な庶民的生活風景と憂鬱な霧囲気とを持つ巢鴨、池袋、練馬のあたりを、家族をかかえて転々と借家住まいしていくようと思われる。しかもその間に画期的な『自分は見た』以後、『虹』、『野天の光り』など十冊の詩集に加えて、ほかに二冊の短篇と戯曲の集、一冊の隨想集を次々と出版させた。この間頭に変調を来たして幾らかの空白の時も持つたらしいが、やがて大東亜戦争が始まつて、昭和十九年に

は長男宏がビルマで戦死し、翌年三月糟糠の妻千代子が疎開先の埼玉県吾野の田舎で病没した。この選詩集の巻末を飾る「三月」という詩は、永年の人生の明暗苦樂を共にした亡き愛妻への、眞に惻々と胸迫るような哀歌の一つである。

*

千家元麿の詩業のあとを辿つて見ると、その流れは初めに太く終りに細くなっている。それはひとり作品の量においてばかりでなく、質においてもまたそうである。彼は数年の間に持つてゐるすべてを使い尽し、その後は惰性か、稀に訪れる靈感か、或いは過去の作品の残響によつて書いていたように思われる。おそらく病氣のための空白や、予後の肉体的・精神的の疲労や衰退が原因したのである。それにしても彼は早くから吐き出すのに急で、攝取するのにおろそかだったのではないかだろうか。又たとえ攝取はしても余りにも自己流に早呑みこみで、且つその栄養の対象が、余りに当時の『白樺』的な物に限られていたのではないだろうか。彼の作品には他からのかきびしい批判というものが向けられなかつた。純粹で素朴で恬淡で恥ずかしがり屋で、常に同情と愛とにせつなく満たされていたこの善人、この巷と田園の歌の天使を温かく囲むものに、少數の作家や画家の一団があり、ひたむきに彼に心酔する一群の若い詩人達があつた。それはまことに幸福な事には相違なかつたが、又いちめん他山の石、口に苦い良薬を手にしなかつた事は、芸術家としての彼に

とつて幾らか惜むべき事ではなかつたろうか。
しばしば私は考えるのだが、もしも彼が『自分は見た』や『虹』や『野天の光り』等に示した意欲と、充実と、力量と、特色とを、更に深く広々と押し進めて行つたならば、どんな未前の詩芸術の一天地が新しくわが国に出現したことだらう。その畢生の作の合本はおそらく日本の『草の葉』とも言うべき物になつたろう。そして或いは重たく堂々とした大冊に仕立てられ、或いは軽く手丈夫な袖珍本に製本されて、広く永く人々に愛され読まれたことだらう。實際彼の詩は本質としてもそう成つて然るべきものであり、芸術家を動かすと同時に大衆の心に訴え、それを摑む力を持つてゐるからである。

私はあの「車の音」、「野球」、「村の郵便配達」のよう、貧しい庶民的生活者への人間愛と共感とから対象を偉大なものにまで聳え立たせる彼の、その正しく、健康で、更に圧倒的な力感に溢れた作品をどんなに好きだらう。これこそ真にホイットマン、ミレー、ゴッホに心酔してやまなかつた詩人の作品である。又あの「白鳥の悲しみ」、「象」、「蛇」のような、実相観人の驚嘆すべき深さにまで達した作品をどんなに愛するだらう。これらもまた彼の傾倒したゴッホを通じる道であると同時に、彼の遂に口にしなかつたライナー・マリア・リルケの、あの物の詩の眞諦にも脈絡するものである。

第一詩集『自分は見た』は大正七年（一九一八年）彼が満三十歳の時に東京の玄文社から出た。内容の詩は九十七篇、亡父尊福に獻げられて、表紙は岸田劉生、序文を武者小路実篤が書いてゐる。武者小路はその長い序文の中でこう言つてゐる、「自分は日本の今の詩壇からは門外漢かも知れない。しかし本当の詩には自分は門外漢ではない。（中略）自

独特である事をやめないだらう。彼の早逝はまことに惜しく、半途でのその罹病と疲弊とは一層惜しい。私がこの選詩と解説とを喜んで引き受けたのも、實に畏友千家元麿への讃嘆と敬愛と哀惜との故にほかならない。

一九六八年十月三十一日（『タベの旋律』所収）

詩の解説

千家元麿の人となりと作品の独自性については、その概観をすでに書いた。それゆえ私はこの項で幾つかの詩を取り上げてその鑑賞を試みることにするが、紙数の制限もあるので多くを望むわけにはいかず、自分で選んで採録したものの中から作者の特色の一層顯著なものを振りすぐつて、それらについて若干の感想を述べるのほかはない。しかもそのためには『自分は見た』と、『虹』と、『野天の光り』の三冊の中の作品を主として問題にした。なぜかと言えばこの三冊にこそ、彼の詩の園はその最も見事な花を咲かせているように思われるからである。

第一詩集『自分は見た』は大正七年（一九一八年）彼が満三十歳の時に東京の玄文社から出た。内容の詩は九十七篇、亡父尊福に獻げられて、表紙は岸田劉生、序文を武者小路実篤が書いてゐる。武者小路はその長い序文の中でもこう言つてゐる、「自分は日本の今の詩壇からは門外漢かも知れない。しかし本当の詩には自分は門外漢ではない。（中略）自

分は日本に眞の詩人があるかと聞かれた時に、自分は『ゐる』と答へる光榮を有してゐる。そして自分は今の日本の詩人で誰を一番尊敬してゐるかと云はれても、自分は即座に答へることが出来る。そして今の日本で最もよき詩集はなんだと聞かれても自分はたちどころに答へることが出来る。その詩人は千家であつて、その詩集はこの本である」と。そして当の千家はと言えば、彼はその短い自序の中で、「自分はこの詩集に誇りを持つことを禁じ得ない」と簡潔に言い切つている。

まったくそう言われても無理ではなかつた。自身初めてこの詩集を手にした時の驚きと感動を今でもはつきりと覚えている。劈頭を飾る「車の音」が先ず私の初心をとらえた。深夜の巣鴨の大通りを天から繰り出して来るよくな夥しい百姓の車の木の輪の音。それは彼の好きなホイットマンの『草の葉』から根本的な靈感をうけた、眞に日本の庶民的・人間的な生活美への讃美歌だった。「揃ひも揃つて選り抜きの、よく洗はれた、手入れの届いた、簡単で、調法な、木の車の自信のある安らかな音色」への愛がこの詩の中で繰り返し変奏される主題であり、全篇の擗みどころでもある。「着物は綺麗だが頭でつかちだ」という近所の子供達の奇抜な評語を含む「わが児は歩む」は、散歩の途中の描写に幾分冗長な点が見られるかも知れないが、その飾りけのない率直さには読む者をほほえませ、心を温ませる力がある。同じ事が「野球」の場合にも言える。ここでは電氣会社の前の草原

で近くの小さなメリヤスシャツ工場の職工達がボールのノックを受けているのだが、どこで習つたのか皆上手で、「一人一人が病的な美しいなつこさ」を持っていて、「その姿がまるで星のやうに美しい」という条は凄いほど利いている。そしてこういう処が彼千家の独擅場、その無類の魅力である。「飯」にしてもそうだ。「君は知つてゐるか、全力で働いて頭の疲れたあとで飯を食ふ喜びを。赤ん坊が乳を呑む時、涙ぐむやうに、冷たい飯を頬張ると余りのうまさに自ら笑ひが頬を崩し、眼に涙が浮ぶのを知つてゐるか」が主体となつてゐるこの僅か九行の短い一篇を読んで、辺幅を飾ることのない彼の目に見えるような正直さ、人の善さに、却つておのれを省るものの私一人ではないであろう。詩集と同じ題を持つ「自分は見た」も、「野球」や「飯」と同様に彼の人間性のにじみ出でている詩だが、貧しい場末の下駄屋の店先で仕事をしている主人と、赤子を抱いてぼんやり框へ腰をかけている女房と、板の間へ立つて二人を見下ろしている彼らの老父との、そのいすれの顔で最後に「それを思ふ度に涙が出る。何事のありしかは知らず。されど自分は未だかゝる痛苦に迫つた顔を見し事なし。かかる暗き光景を見し事なし」と、半ば文語体の絶望的な一句で結んでいる。そしてこうした破調に、われわれはむしろ詩人の遺憾ない気持を汲み取るのである。その意味では「白鳥の悲しみ」

でもまた慰めのない場景が採り上げられてゐる。動物園の白鳥の母親が園丁から大切な二つの卵を奪つて行かれた処を目撃して書いたものが、やがて悲しみの母であるその白鳥は氣を取り直して水中へ躍りこみ、「涙を洗ふやうに、悲しみを紛らすやうに、その純白の胸も首も水中へひたし、水煙を上げて悶えた。然しそれはとり乱したやうには見えなかつた。さうして晴々した日の中で悲しみを空に発散した」。そして詩人はそこに美しく痛切で偉大でさえあるものを感じた。詩全体がリルケの形象詩を想わせながら、しかもリルケの持たなかつた、又あえて持とうともしなかつた、人間らしいせつない愛情から書かれている。「立ち話し」や「朝飯」や「櫛」のようなものはそれまでにも書いた人が無く、今後もまた書く人が無いであろうが、それを平氣で、立派な主題として、心をこめて書いた詩人を私は愛さずにはいられない。序に言え巴「貧しい母親」という詩で、「高い煉瓦の壁の中で 赤い着物を着てゐるのを見たら、私の乳は上つてしまつた」とあるその高い煉瓦の壁は当時の巣鴨監獄のことであり、赤い着物とは女の夫である囚人が着せられている獄衣のことである。この詩を書いた時、作者はおそらく巣鴨に住んでいたのであろう。

第二詩集『虹』は大正八年（一九一九年）

千家三十一歳の時に新潮社から出た。岸田劉生の一層美しい装幀で、武者小路実篤に献呈されている。これに付けられた作者の序文は第一詩集のものよりも遙かに長く、詩の形を

とつた全文が喜びと自負と前途への希望に満ち満ちている。内容は長短百二十六篇から成っているが、この中では「象」と「村の郵便配達」とが最も注目すべき逸品である。そして「象」が或る意味でリルケを想わせながら尚あの『形象詩集』の詩人を凌駕しているとすれば、「村の郵便配達」は作者の愛してやまなかつたゴッホとその画とを想わせる。先ず「象」こそはすばらしい。詩人は動物園でこの巨獸の吼えるところを見てい。『象は鼻を牙に巻きつけて巨きな頭をのし上げて、薄赤いゴムで造つたやうな口を開いて長く吼えた』。長い太い鼻を牙に巻きつけるのであり、柔かい口はゴムで造られた物のようである。先ずこれが第一に見事である。続いて「一分三分、四分位たつと再び象は鼻を口の中に巻き込んでくはえた。さうして異常な丈となり、不思議な痛ましい曲譜を吹き鳴らした」。この巻き込んでくはえるの語感が、なんと如実で逞しく見える事か！異常な丈となりも写実を超えた写実である。「やがて彼はまた何ものにか促されて凄じい姿となり、巨頭を天の一方に捧げて三ベン目を吼えた」。

角灯提げて、全身を鱗か鎧のよう光らせてやつて来る。「うしろに銀の征矢を背負つてゐるやうに」。深夜の豪雨の山道や森や畠を辿り辿つて村へ着いた嬉しさに、彼は「心気亢進して輝くやうだ」。黒い頭巾の蔭のその顔は透明な瑪瑙のように赤く、異様な大きなすがすがしい眼を光らせて、濡れ濡れた合羽の下から大事そつに郵便物を取り出す。彼は「熱い息をはずませ、受取る人も沈黙し、闇と光りの中で眼を集めて選り分ける濡れない葉書や手紙の美しさ。光りの中に浮んで闇に消え入る人の宛名の美しさ」。これだ！これこそ画家ゴッホをこよなく愛した詩人千家元麿の真骨頂だ。

私はなお『野天の光り』その他に言及したかったが、紙数が尽きたのでここで一先ずペンを擱かなくてはならない。述べ尽せなかつた処は読者諸賢の一層こまかい鑑賞にまちたい。

夜もすがら眠れる人々の上に天使が舞ひ下りて、休みもせず遠く遠くから、カラ／＼カラ／＼調面白く、よく廻りあとからあとから空に漲り、地に触れて跳ねかへり一杯にひろがつて来る。おびただしい木の輪の音。

氣が附けばます／＼音は元氣づき、密集団となり忙しなく天の戸を皆んな繰り出した音のやうに喜びに満ちた勇ましい同じ小さな木の輪の音が恐ろしいやうにやつて来る。

一つ一つ夥しい星の中から生れてぬけ出して来る。もう余程通り過ぎてしまつたやうに初めから終りまで同じ音で此世へやつて来る。

暁方になるとその音は天使の見離した夢のやうに消えてしまふ。天と地とのつなぎをへだて、しまふ何処かへ蜂が巣を替へてしまつた跡のやうに一つも聞えなくなる。

鋭敏になつた頭には今度は地上のあらゆる音を聞く馬鹿らしい夜鳥の自動車の浮いた音や、間の抜けた眠さうな不平をこぼす汽笛や、

輪の、

飾り気のない、元気な単調な音ばかり、天から練り出して来る。

千家元麿の大通りを田舎から百姓の車がカラ／＼カラ／＼と小さな轟いた木の音を立て、無数に遣つて来る。いきなりその音は絶える間もなく、暖やかに密にして来る。

人声は一つも聞えない。何千何万と知れない車の鳴る。

* 参考資料

車 の 音

千家元麿

一九六八年十一月十日（『タベの旋律』所収）

あゝ毎晩々々、雨の降る夜も星の降る夜も、自分

の頭に響いて来る

無数の百姓の車の音は自分に喜びを運んで来る

飾り気の無い木の音のいつも変らない快さ

天から幸福を運んで繰り出して来る神來の無数の

車を迎へる。

その一つ事に熱中した心の底から親切な、

喜びいそぐ無数の車の音、楽しい、賑やかな、勇

ましい音。

あゝ汝の勝利だ

その一生懸命な小さきれど氣の揃つた

豊かな百姓車の軍勢が堂々と繰り出して行つたら

何でも負ける。

道を譲る

あゝ勇ましい木の輪の音の行列よ

どん／＼繰り出して來い。

天の一方から下りて來い

下界を目がけて、一直線に遠い／＼ところから走

つて来る星のやうに

都會を目がけてその一糸も乱さず、整然と

同じ法則、同じ姿勢で

立派に揃つた、木の音で

電車道を踏み鳴らして行け、躍つて行け

揃ひも揃つて選り抜きの、よく洗はれた手入の届

いた、簡単で、

調法な、木の車の自信のある安らかな音色よ

何のもお前の音に敵ふ奴は無い。

憎々しい憤弱な病的な汽笛や不平な野心の逞しい機械の音より

どの位、

お前の勤勉な尽きない木の音の方が俺は大好きだ

か知れないぞ、

前にゆくもの、音を受けついで、後から来る者に

伝へて、

赤児のやうに生れて来る、

汝の尽きる事なく繰り出す音は

此世のものではない、天上のものだ

喜びだ、勝どきだ。

おゝ又気がつけば賑やかな、いつも機嫌な木の輪

の音の群

満ち、溢れ、尽きずくり出して來て

ぴたり跡を残さず消えて行く自信のある歌ひぶりよ

尾崎処女詩集の頃

蛇窪から

「嵐」 大正十一年六月

「嵐」の五月号で佐藤に就て云つてゐる千家の言葉には全部同感した。そして二人の友情を限りなく美しいと思つた。どうか千家が佐藤を細かく評論すると云つたのを本当にやつてもらひ度い。およそ美しい熱烈なものが出来るだらうと思つてゐる。秀れた友達で、いつも瀟洒とした元気を持つてゐて、その上一身上にも幸福である呉れると思ふと、離れてゐても安心してゐられる。時々畠や田甫の散歩をしながら千家のことを考へたり、川崎の方の煙を見て佐藤の事を思つたりして、涙ぐむ。廿四五の時分の事をよく考へ出す。

先月の大雨の日に、遠い田舎の僕の家まで千家と広瀬が訪ねて来てくれたのは嬉しかつた。三人ともよく元気に話した。佐藤がゐた

無数の百姓車の木の輪の音、

俺は毎晩待つてゐる。きつと氣がつく

お前の来るのを待つのは恐いけれど

来てしまへば俺は元氣づいて躍り出す、

気がつけば引つきりなしに遣つて来る、神來の

喜び！

木の音の行列、夥しい星の歌、一粒撰りの新しい音色！

天の戸をくる喜びの歌、朝の歌！

氣の揃つた一団の可愛ゆい、小さな百姓車の行進曲！

無数の百姓車の木の輪の音、

お前の勤勉な尽きない木の音の方が俺は大好きだ

か知れないぞ、

前にゆくもの、音を受けついで、後から来る者に

伝へて、

赤児のやうに生れて来る、

汝の尽きる事なく繰り出す音は

此世のものではない、天上のものだ

喜びだ、勝どきだ。

おゝ又気がつけば賑やかな、いつも機嫌な木の輪

の音の群

満ち、溢れ、尽きずくり出して來て

ぴたり跡を残さず消えて行く自信のある歌ひぶりよ

神來が來り、

大擾亂を呈して過ぎ去つたあとのやうに一つも残

さず、

漏れる事なく歌ひ終る。

無数の木の輪の音、

わが愛す、喜びの歌、

平易で味の無いやうで

無限な味の籠つた

天の変化にも追ひつく、単調な喜びの歌、

天來の音、呱々の声

簡単で安全な、よく洗はれた、手入のいゝ、親切

な車の輪の音、

氣の揃つた賑やかなコーラス

毎晚来てくれ、

毎晩調子を揃へて繰り出して来てくれる

巣鴨の大通りを田舎からつづいて来る

ら又一層活氣があつたらう。いゝ友達は顔を見てゐるだけでもいゝ。仕事の話がそれにまじれば尚いゝ。その内千家達と自作の詩の朗読会をしたいと思つてゐる。

僕の詩集「空と樹木」は五月一杯には出るだらう。ヴエルハーランとホキットマンの生れた月だ。この廿一日には一人でヴエルハーラン祭をやらうと思つてゐる。額の写真に野から折りとつて来た櫛の若枝と野葡萄の蔓とを掛け、小さな花壇の金魚草やマーガレットを捧げて。そして彼の特別に好きだつたビルの一壇に彼と自分とのお祝をしやう。

「新詩人」の五月号で井上康文君が僕の事を何か云つてゐる。井上君には僕と云ふ人間がまるで解つてゐないらしい。今日此頃僕のものを見始めた人には解らないのも無理はないだらうが、井上君ももう少し僕の精神を感じてくれるといふ。それに五月の「思想」に出てゐるヴエルハーランの「天才について」も読んで置かれるといふ。僕の生産の豊饒な理由が、多少なりとも解つてくれるだらう。僕は井上君その人の気持にはいつも同感も同情も持つてゐるのだ。

とにかく、製作によつて自分をより高く、より清く、より豊かにするより道がない。僕は是を生活と云ふ。あゝ、我等の内に微かに光つてゐて、しかも我等がいつも至上の天に憧れて見つめるもの！それを手にしたいのだ。それに此の胸を満たしたいのだ。

「人間精神は一つの絶巓を有つ。此の絶巓は理想である。神は其処へ降り、人は其処への

ぼ」る（ユーロー）實に、其処へのぼりたいのだ！

六月には「詩聖」へ「自我の讚美」、「成長

する星の群」へ「熱望」が多分出る。両方とも胸を打つて書いた、長いものだ。僕は今後益々自分をはつきり生かしたい。元來僕の生活と芸術とは、一個の強いい、シズムの体現だ。僕とり、シズムとは絶ち難い糸で紺はれてゐる。僕が事物を感じる時、それは常に常にリ、カルに来る。僕はその中に飛び込んで書くより外仕方がなくなる。僕の多作の原因が其處にある。それに僕のエネルギーが僕をぢつとしては置かせない。僕の製作態度は常に衝動的だ、常に飛躍的だ。だから僕は静的なもの、瞑想的なもの求めるのは無理だ。どう云ふ態度が善い悪いと云ふのではない。

芸術の分野の中、鬱蒼たる個性の森林中で、何はあれ巨木になれと云ふのだ。僕は一切に愛を持つ。たゞ自分の傾向、自分の性情はどうする事も出来ない、生かし高めるより仕方がないと云ふ事を切言するのみである。

十八九の頃から作曲家になりたかつた。今でも作曲家の仕事には眞剣に心を惹かれる。

それが出来ないので詩を一生の仕事に選んだのである。僕のもの、中に、さう云ふ分子を感じてくれてゐる人も、僕にとつては知己である。

編輯の都合さへよかつたら「嵐」に毎月書かして貰ひたい。一ばん氣持がよく、一ばんいゝ友達の集つてゐるのは「嵐」だから。その内みんなと逢ひたいものだ。（五月十二日）

尾崎處女詩集の頃

「詩聖」大正十一年六月
碧落莊私記

仕事の合間、食後の休み時間、草花の世話の暇々、そんな極く僅かなブリーフな時間をうまく利用して、これから此の私記を書いてゆかうと思ふ。どうせ引括つて鞄の底へ投げこまれて、はては忘られる位が落な消閑の代物だが、ことによるとこんな断片の中からでも、少しは貴重なものが出て来ないとは限らない。又私自身として云へば、一日二十四時間生きられるだけ生きて、そこから落ちこぼれた生活の微塵を拾ひあつめて置いて何かの時の心嬉しい思ひ出の種にしたいのである。

それに私の詩を読んで呉れる人達には、あんな詩の出来る謂はれがよく分ると思ふ。詩でもなければ散文詩でもなく、論文でもなければ日記でもない。たゞほんの心覚えにすぎぬ私記ではあるが、私と云ふ人間の本体の少しばかりは出てゐる断片の記録が、これを読む誰かの時間を楽しくさせる事が出来れば望外の仕合せである。

詩集の名——空と樹木、風に吹かれる草

詩人としての自分を世の中に押し出す最初の詩集に最もぴつたりした、若々しい、そして永く飽きることのない名をつけやうと云ふのがかなり前からの希望だつた。それには日光とか、風とか、とにかく人間性の光明方面を暗示した、その上不斷に生長する意味を持

つて、大地的な感じのある題目が欲しかった。

しかも飽くまで地道な又一味の颯爽たるもの、ある。ところが或る日——去年の夏のことだ——友人の画家木村泰雄と日比谷公園を日に一回の規則のやうな散歩をしてみると、強い炎天の光が真青な中に溶けこんだ八月の空と、その空にしいんと葉を茂らせてゐるプラタヌの高い木立とが目にはいつた。その時、たちまち考へついたのが「空と樹木」と云ふ名である。人はどう思ふか知れないが、自分には文句の無い程いゝ名が、しかも天啓のやうに来たのだから随分満足してゐる。一週間ばかり前の事だが蛇窓の自分の家から池袋にゐる千家元麿を訪ねる省線電車の中で偶然うれしい事に逢つた。私の隣の席に若い妻君とその娘らしい五つ位になる、洋服を着た女の子とがゐた。丁度うしろが板羽目になつてゐるので女の子は窓の外が見られないでじぶくつてゐた。やがての事に向ふの席があつた。子供は母親をせき立ててその空いた席へ行かうとすると、それには気がつかずに、立つてゐた男の人に向ふの席へ腰かけてしまつた。子供は泣き出しきうな顔をしてその男の顔を見つめてゐたが、又母親の膝につかまつてじぶくり始めた。するとその若い、美しい束髪を結った母親が子供に斯う云つた。「ここからだつて空と樹が見えるから、それでいいのよ!」何と云ふ不意に出た善い言葉だらう!私はうれしかつた。そしてこれは実際にあつた話である。

小さい方の詩集の名も、思ひつめてゐる時

には出て来なくつて不図した機会に頭へ浮かんだ。一と月ばかり前いつものやうに畠の中を散歩して、やがてちょっと草に腰をおろして休んでみると、目の前の麦畑が晩春の風をあをあをと戦いてゐた。「風に吹かれる草」と云ふのが、その時ひらりと私の唇に乗つた言葉である。「風に吹かれる麦」の方がいいかも知れない。けれども草の方が広い環境を感じさせると思ふ。よく晴れた立派な日で、夕方最後の雲雀が野に落ちると、淡桃いろの雲の間にこの頃わけても美しい宵の明星があでやかに輝いてゐた。

友達からの善い葉書二枚

「御葉書見ました。あなたの二つの詩集を私がどんなにたのしみに待つてゐたかは、恐らくあなたの想像以上でせう。あなたが詩の世界に出て來た事は、私等の心強さを増す事です。

唯一至上のもの、さうです。それより外はありません。その命ずるるままに各自が生きるより外は。そして日常の瑣事が悉く光を發して詩眼となる世界へ入る事です。

私はこの頃自分の内の火の、自分一個のものない事を驚き感じてゐます。この炎に形を与へることこそ一大事

「先日は失敬。ひきずりまはして大変疲れた

らうとおもひます。その後の仕事はどうです。

君が毎日好いものを作るかと思ふと僕は少なからぬ恐畏を感じます。今日から江渡さんの胸像をはじめました。また少しはよくなりさ

うです。新らしいものを作る毎に息を吹きかへしたやうな氣がします。たゞ、一日から始まるロダンの展覧会が恐ろしい。窒息しさうです。若い勉強時代に、完成した人の作品を見ると実に辛抱の苦しさを感じる。熾んな敵対心が燃えます。唯地道の精進のみです。僕は五月十日頃からモデルを使ひます。君の本はいかゞ。大分気にしてゐます」

前者は高村光太郎兄の後のは高田博厚のである。ライヴエートなどをだすのはどうかと思つたけれどそれに自分の事を書いてあるところは恐縮するが、自分の現在の周囲の空氣を知らせたいので発表させてもらふ。

「詩人の印象」千家元麿他

「感じ」の表現者

「日本詩人」大正十三年七月

千家元麿君の詩は、これを約説すると、感じ、追及の芸術であるやうに思はれる。そして氏の作品をとつて賞讃擱くことのない読者の見るところも、一切の附隨的な要素を除外すれば、此の一点に於て合致してゐるやうに見える。そして私もその一人である。

極めて端的に、卒直に、主題の性質に空進して、其處に燃ゆるがやうな熱情を灑ぎかけ、独特な言葉と詩風とをもつてリアリティーを神秘な姿にまで持ちきたす一箇不可思議な技術を持つてゐる点で、正に千家君は詩壇の人者である。

賞讃は出来る。理解も出来る。しかし此れを模倣する時、人は失敗する。この藝術は千

家君の肉体及び心的状態の根柢に深く交渉して、この泉からのみ噴出するユニックな芸術だからである。

従つて氏の模倣者は、地上最も滑稽なカリケチュアに落ちる。

感じの追及は一箇の主題に対する創作熱情の重心を置く。綜合的な、統一的な、また建設的な精神は此處で問題になつてゐない。擅みとり、描き深め、その好むところの題目と同じ生命を深き。態度はヴィンセント・グラン・ゴツホに酷似する。たゞ両者の性情の相違のため、千家君には、かのゴツホの神秘なデゴラチヴがない。元より此の対称は便宜のためである。全然その成立の原因を異とする画家と詩人と私は決して混同しない。

また感じの追及は季題への追及と関係を持つ。自然を題材とした千家君の短かい詩を見て、私は強くそれを思ふ。俳句に於ける季題趣味が、千家君のそれと何処かに一致点を持つてゐる。しかし彼は飽くまでも現代人である。その教養も現代のものである。従つて彼ほどの動的要素を持たない詩人が彼の題材及び手法をまねると、それは、かの日本派俳句の最も下級なもの、更に下方に低下する。

また感じの追及は、千家君の場合極めて熱烈奔放なので、その結果は往々にして短見者流から、粗野、幼稚のそりを受ける。お上品な詩壇の殿上人には、この荒野の牧者の叫びは解らない。しかし反対に、粗野、幼稚に見える手法を直ちに善しとして模倣し、それを純粹、自然の名によつてジャスチファイする者のある時、その人は愍るべきである。実際に、感じの表現に於て千家君は独歩である。しかし感じの表現が芸術の生命の全部ではない。余りに「感じ」の乏しい現在の我国文壇では元よりそれも貴重であるが、單なる「感じ」の一命題で芸術を律するのは危険である。否むしろ初なる啓蒙である。人は須く世界を見ねばならない。犀利な眼をもつて全戦野の戦況を見ねばならない。千家君を小さくしてはいけない。ブーシュキン等を持ち来て比較しては幼い。ブーシュキンはブーシュキン、我が千家君はあくまで千家君である。彼をして益々その全力を挙げしめよ！ その神秘な美、涙をもてる哄笑、善良と諷刺とをあくまで生かしめよ！

この点千家君が、殆んどその対照的な方面にある宮崎丈二君を最も親愛な友として待つ事は心を安んじるに足る。私は遙かに相互の友情を祝しながら安心してゐる。

世紀独特の力と辛辣さとをもつて喝破してゐる。詩人千家元麿が最近世に公にした詩集「夏草」。一巻五五〇頁、四二〇篇の詩から成る此の旺な詩集を通読した時、たちまち私の頭に浮んだのは「続自然論」の著者此の言葉であつた。なぜかと云へば、今の日本の詩人で、一般民衆の健全な心に触れ、美に対する彼等のあこがれに直接訴へること、彼れ千家の右に出る者はなく、その卒直さとその丈夫さとその善良さとその心弱さと、又貧しくて心美はしい人々に語りかけるその優しさとに於て、彼以上に民衆的である者はなく、彼の場合何時もさうであるやうに、今度の詩集に於ても、それが「民衆の書」の一つに加へられて恥づかしくないものだと云ふ事を私は信ずるからである。

「夏草」を読んで何よりも驚くのは、詩人千家の何時に変らぬ多産と、その魂の若さである。彼が詩作を初めてから茲に十余年、第一詩集「自分は見た」以後すでに八、九冊目。それにも拘らず此の詩人は昔のやうに生々と若々しく、又昔のやうに潑刺として清新な想像力と創作力を失つてゐない。人は「夏草」の中で、ところどころ彼の老を、又精神の幾らかの弛緩を感じるかも知れない。さういふ感じは彼の作品の極めて断片的なもの、所謂俳諧詩風なもの、中に現れてゐる。私は其等々へもが持つ或種の価値を認めない者ではないが、しかし其種のものが彼千家の名に多く値しないだらうと信ずる自分の考へを卒直に告げて置きたい。とは云へ此れは今のところ

詩集「夏草」を読んで

〔都新聞〕大正十五年八月二十一、三日

十八世紀フランスの百科辞書編纂者の一人

である英邁ディドロオは、民衆の氣力と社会的連帶心とを鼓舞するその国民的祝祭劇の計画を叙述した後で、「凡そこのやうな万人共同の歓喜の日の下で、一人詰まらなさうな顔をしてゐたり冷淡にしてゐるやうな者は、その心中に何かしら不徳なものを持つてゐる人間である」と云ふ意味のことを、あの十八

極めて些末な事柄である。詩集「夏草」は、忽ちにして押し流してくれるやうな、別の、生氣に輝いた、充実した、奔逸する、まことに天才千家に、我等の千家にふさはしい作品で充满してゐる。それは洪水である。清濁併せ呑んでやがて大海に合する莫大な量の水である。又それは七月の山野を隈なく埋める草木の、あの方図もない氾濫である。その下で咲いては枯る名もない草や苔の花の運命が何であらう。驚くべきは彼の旺盛な創作力と、たゞひもない想像力である。この鬱蒼たる詩の森の広さである。詩そのものに魂を奪はれた単純な彼の聖なる醉の深さである。その赤子の無邪気な手をとつて歩ませる芸術の神、の、彼の全き信頼と恭順である。千家を愛せよ！ 彼は万人にその歌を捧げる。日本が生んだ此ハンス・ザックスの子を愛さう！

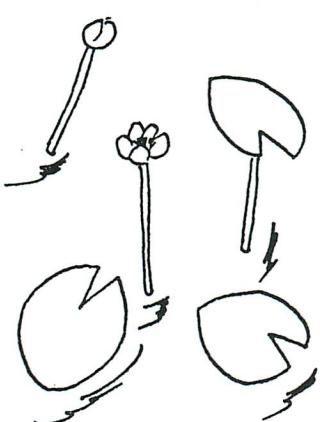
私一個の信念と好みとから云へば、「夏草」の中でも最も心を打たれる種類のものは、矢張り千家の比較的長い詩である。其處には出し惜しみがない。言葉の節約と云ふ、よく若い詩人が引掛つて本来の創作力を渦らすあの詩学の宝石を無視してゐる。美がその片鱗だけをちらりと見せてゐないで、物が丸ごとである。生中の彫琢の腐心で生氣を無くしてしまふよりも無技巧とも見れば見られる独特の手法で、秋の木の葉を吹まくる風のやうな、内心のリズムと想像力とに自分を任せきつてゐる。従つて其処には詩の形態美がない。又音数上の、言葉そのもの、価値^{アリュウ}への、一凡そ

此種の詩作上重大な意義を持つ種々の条件への、それと感じられる顧慮がない。彼自身が蝉の合唱を書いた詩の中で云つてゐるやうに、勝手氣儘である。それでゐて其処に不思議な調和がある。千家にして初めて生かす事の出来る不協和の協和がある。身を投げ出して初めて生き得る道である。彼がどのやうにしてその詩を書くか。それは千家自身が語つてゐる（冬の夜の詩作）。この状態は、ちやうど、後から後から流れ出してくる樂想を「々樂譜で書く暇がなくて、一種の音樂連法を案出せざにはゐられなかつたと云ふ、あの管絃樂の鬼才、エクトル・ベルリオの全盛の時を想はせる。此種の作品の中で最もすぐれたものは「一日」「日の光」「夕暮」「菊」「秋の讃美」と詩人の役目等である。

人間に對する、動物に對する、又極めて卑近な日常生活に對するその底知れぬ優しい心理的滲透力とユーモラスなりアリズムとは、

彼千家にあつて独自な、最も人間らしい、そして此れこそ實に彼をして民衆の樂い伴侣たらしめるものである。彼は「野兎」を書く。

「子供と犬」を書く。「溪流に棲む魚」を書く。更に家庭生活の傑作の一組である「春の夜」を、「或晚」を、「御祭見物」を、そしてわけても抜群の「或る時」を書く。すべて此等の作品は、万人の善き心に咲きかける花であり、晩年のミレーの素描の、あの父らしい一味の哀愁をさへ伴つたものである。



(編集部)引用の詩の題に統く該當頁は削る。マイクロフィルムからの解説 嘉納忠明氏)

いくらる、千家の詩を読む程の人皆に知れ渡つてゐると思ふ。そしてそれは實際此の詩集全体を通して打つてゐる脈搏のやうなものである。又其処に駆使されてゐる言葉に對して彼は、ひとり彼のみに許される不思議な適合性と、云ひ難い境に於ける規準とを持つてゐる。これこそ何人も詩人千家から奪ひひとつの出来ない魔法であり、要素であり、本能の力に近い技巧である。そして此れこそ千家その人の最大の詩人的存在理由である。

斯かる詩人と藝術とを持つ事は幸福である。又生活の伴侣としてその作品を愛する事は更に一層の幸福である。私は心の底から、日本が最初に持つた此の民衆的詩人を尊敬し、その健康と事業とを祝する者である。

もつと深い自然の中へ

千家元麿兄に

乙女の星座の横はる下に
その反射さへも映らぬ都會を孤独の心に描くであらう。
それから、大いなる朝よ！

朝は薔薇いろに光りくゆつて

新鮮な青素若葉に囲まれた私の小屋の眼りを醒ます。

自然の深みに瞑想の形をして眼つてゐた我が家は
その時、窓といふ窓、戸といふ戸を残らず開いて

私は底知れぬ羞明に眼をしばたゝき、

清冽な小川の水に口そゝぎ、顔を洗つて、

より善く、より正しい生活を体験し、意識し、深めるため

深遠な静寂と燐爛たる光明との一日に向ふだらう。

おゝ、仕事の窓の前、午前の涼しさに、

木笛のアリヤを試みる枝の小鳥よ！

お前の赤い咽頭、灰いろの胸が

玉を綴つたやうな楓の葉むらからちらちら見える時、

どんなに仄やかな初夏の詩を感じることが！

また雑草に蒸された家のまはり、戸口の附近、

或は屋根の高さに飛びめぐる

黄金の地蜂、緑泥の蟬、七宝の玉虫よ！

お前達の飛揚や狩や巣の営みを熟視し研究する事が

あの熱氣と音楽との豊麗な夏の日に生きる私に

どんなに激測として又よく忍耐する精神を強めさせる事か！

私は野川へ水浴にゆく。

流のふちに河骨は黄色の瞳を輝かせ、鉤形の葉を並べ、

絹のやうな水中に

泥鰌、鯰、目高、鮪などの魚族がたくさん泳いでゐる。

狸藻の花は私の濡れた胸に着き、

水葵の花は私の頬を打つだらう。

さうすると私は草に横はり、青空を見上げて

知つてゐる限りの歌を歌ひ、知らない歌を作曲するだらう。

私は風景に呼びかけ、稻田を吹く風に呼びかけ、

どんな愛惜のひびきを聞くことか。

私は立ちあがつて窓をひらき、

しつとりした夜氣を胸に吸ひこみ、

南方の青白い地平線のあたり、

そのひとつつを今は懐かしく考へながら

時折吐く溜息に

私の眼前には過去の日の思ひ出が宝石のやうに輝き、

そのひとつつを今は懐かしく考へながら

時折吐く溜息に

どんな愛惜のひびきを聞くことか。

私は立ちあがつて窓をひらき、

しつとりした夜氣を胸に吸ひこみ、

南方の青白い地平線のあたり、

日光に呼びかけ、樹木に呼びかけ、

また、草に、田甫路に、轍のあとに、石橋に呼びかける。

それから、秋の更紗の槿の垣根、
街道をごろごろ行く牛車や荷車、

野の遠方の高圧電気の鉄柱、

それより遠い山脈を私は歌ふだらう。

また天の高く澄みわたつた秋の日曜日や彼岸には
こんな田舎で久しうりに見る。

都會の家族連れの嬉しさうな遠足を歌ふだらう。

私は違つた地点から見た我が家の可憐さを歌ふだらう。

また日中の烟に働いてゐる百姓を、女房を、娘を、

そして彼等の帰り道と、薄明りの中へ消えてゆくその楽しい話し声と、

やがて彼等の藁屋根の下から湧きあがる夕げの煙の平和を歌ふだらう。

私は積み上げられた、玉蜀黍を歌ひ、

枝から枝へ懸けわたされた乾大根を歌ひ、

屋根のひさしに燃えてゐる真紅の唐辛子を歌ひ、

地面にころがつた肉色の馬鈴薯を歌ふだらう。

また納屋の中の農具を歌ひ、其処につながれた番犬を歌ひ、

いたづらで多産なレグホンやコーチンや

強くて忠誠な家畜の群を歌ふだらう。

私の詩の題材は深い井戸の生水のやうに尽きず、

私は一切事物に讃美の心をうごかすのだ。

また私は仕事に熱中し、読書し、散歩し、瞑想しながら

その余の時間を

小さな鶏舎と、狭い畠と、愛すべき花壇とに捧げ、

また食事の野菜料理と、何かの手細工とに

一日の些少な時間を埋めて生活を緻密にするだらう。

それから友達よ！

都會から、また田舎から来る懐かしい君達！

私の運命に何かしら重大な役割を演じた君達、或は演じてゐる君達。

君達は歓んで迎へられる。

しかし其処は田園のまんなか、草深い鄙だ。

君達への饗應は心にまかせず、

食卓に並ぶのは野菜と、缶詰と、安い葡萄酒だけだ。

あ、しかし、そんな貧しい饗宴が

この健康で快美な田舎では、小屋では、私の傍らでは

どんなに君達を満足させ寬ろがせるかを私は知る。

君達は打ち連れて野山や烟道を歩きまはり、

久しく逢はぬ友達らの消息を語り、聴き、

私達の仕事の状態と希望とに就て昔のやうに話しあひ、

周囲の風物を讃美しながら互ひの友情をその中に溶かしこみ、

かくて夜、長い剛健な晚餐と尽きせぬ会話との後

君は私の頑固な寝台を提供されるのだ。

あ、その夜の私達の平和な眠りを誘つて

ベトーベンのパストーラルが響かないとは誰に云へやうか！

おゝ！ より正しく、よく強く、より確かな、
そしてより美しい生活への熱望が私を驅る！

夕暮、空にかかる緑の星のやうなものがあつて

自然の深みから朗らかな声で私を呼ぶ。

その声は涙ぐましままでに優しく、清く、すきとほり、

愛と鼓舞と、しかも拒み難い権威とをさへもつて私を惹く。

おゝ、それならば私は往かう！

住み馴れた郊外の家をたゞみ、故郷の都會を後にして、

もつと深い自然の中へ、大地の胸のあらはな処へ。

長くあこがれて遂に果たせなかつた

私の夢を実現するために、

また今日までの一切の智慧を生かし

明日からの運命をその大いなる相貌に刻み出すために！

手紙一つ

「ローマ字」大正十一年九月

御無沙汰してしまいました。今日机の引出から君の葉書が見つかって、住所が分つたので此の手紙を書きます。

¹

Kwakki mó ariamatte iru; chikara to, netsu to wakasa to ni. Boku wa kimi no sono taema-nai seisaku no chikara ni kobo sareru. Soshite jitsu ni tanoshiku kimi no shi o aishô suru. Mushakôji-kun ga kimi no shishû o moratta ga, yahari jûsho ga wakarazu, tegami o dasenakatta kara, yoroshiku itte kure to iu koto deshita. Mushakôji-kun wa kimi no "Tennis" no shi o homete imashita. Takata-kun no chôkoku ni mo kanshin shimashita. Hontô ni mirai no aru hito da to omoimashita. Yoroshiku.

Boku wa tsuma ga san ga omoku, ato ga warukatta node inaka no byô-in e ireta tame, kwango ni ittari nani ka shite ima isogashii ga, mó daibu keika ga ii node anshin wa shite imasu, ga ochitsuite shigoto ga dekinai node, chotto dageki o kanjite imasu. Shikashi energy wa soko no hô de hyôgen ni uzumaite imasu, kono aki koso jyûjitsu shita shigoto ni mukaesô de, tanoshimi ni shite imasu. Ima boku wa yasunde iru, daga sugu tachimasu. Raida ni uchikatte yarimasu.

(Ozaki Kihachi-shi ate)
SENGE MOTOMARO.

てしまつたのです。「空と樹木」は、僕がいろいろの事件で迷い苦しんでいるときでも、僕を仕事の方へ誘つてくれました。僕はある青い、気持のいゝ本を、どんなに楽しんで読んだかしれない。楽しんで読める本は少ない。

君の詩集はその稀なもの一つでした。

実際君によつて我々は、一つの新しい道、一空を見出した気がします。君があれを獲得するまでの努力、精進を実に尊く思います。

君はこれからどんどん未来へ進む人です、輝かしい未来へ。僕は君の詩集が、すべての人々に善き糧と感化とを及ぼすことを信じ、また願います。

君の奮闘は目覚ましい。活気もあり余つてゐる、力と、熱と若さとに。僕は君のその絶え間ない制作の力に鼓舞される。そして実際に楽しく君の詩を愛誦する。武者小路君が君の詩集を貰つたが、やはり住所が分らず、手紙を出せなかつたから、よろしく云つてくれということでした。武者小路君は君の「テニス」の詩を貰めていました。高田君の彫刻にも感心しました。本当に未来のある人だと思ひました。よろしく。

僕は妻が産が重く、後が悪かつたので田舎の病院へいたため、看護に行つたり何かして今忙しいが、もう大分経過がいいので安心はしています、が落着いて仕事が出きないのでも、ちよつと打撃を感じています。しかしenergyは底の方で表現に渦巻いています、此の秋こそ充実した仕事に向かえそうで、樂直ぐ立ちます。懶惰に打勝つてやります。

(尾崎喜八宛)

千家元麿

註1

尾崎喜八第一詩集、大正十一年五月、玄文社詩歌部。高村光太郎、千家元麿に献呈。

3 2

武者小路実篤
高田博厚。本書の口絵。高田が制作した尾崎の「首」。

千家元麿と尾崎喜八の交流

—詩集『空と樹木』の成立前後を中心に—

嘉納忠明

千家元麿と尾崎喜八の交流 資料一覧

- | | |
|---|--|
| <p>第一詩集『空と樹木』(高村光太郎、千家元麿に献呈) 大正11・5・11 玄文社詩歌部</p> <p>詩「彫刻」『日本詩人』大11・4</p> <p>詩「海」「白樺」大11・12 (『尾崎喜八詩文集・1』、献辞略)</p> <p>詩「もつと深い自然の中へ」「白樺」大12・4</p> <p>解説(並びに編纂)『千家元麿詩集』(新潮文庫) 昭28・11 新潮社</p> <p>千家さんの全集について『千家元麿全集・下巻』昭40・10 弥生書房</p> <p>千家元麿 人と作品・解説(並びに編纂)『日本詩人全集・12』昭44・1 新潮社(改題)</p> <p>千家元麿の人と作品・千家元麿の詩の解説『タベの旋律』昭44・6 創文社</p> <p>千家元麿君の芸術に就て『日本詩人』大12・8</p> <p>「感じ」の表現者—詩人の印象・千家元麿氏(名氏)『日本詩人』大13・7</p> <p>詩集『夏草』を読んで「都新聞」大15・8</p> | <p>22、23
一一月の詩壇月評 「日本詩人」大10・12
雑感 「詩聖」大12・6</p> <p>六月詩壇月評 「日本詩人」大12・7
震災詩集『災禍の上に』警見 「日本詩人」大13・1
昭和現代詩の鑑賞『日本文学講座9・新詩文学篇』昭9・10 改造社</p> <p>ヒューマニズムの詩と詩人(座談・尾崎喜八、山室静、伊藤信吉)「文学」昭41・8
略年譜『尾崎喜八詩文集・3』昭34・10 創文社</p> <p>序『空と樹木』大11・5・10 玄文社詩歌部
蛇窪から「嵐」大11・6
碧落荘私記 「詩聖」大11・6
緒切日雑記 「詩聖」大11・8
雜記(ロマン・ロラン返書付) 「詩聖」大11・9 (『尾崎喜八資料・3』)
運命を決したもの『東京新聞』昭27・11・4
第一詩集の頃『全詩集大成』現代日本詩人全集 詩人と詩集4 昭29・3 創元社
処女詩集の思い出『尾崎喜八詩文集・8』(初出・思い出「本の手帖」昭36・10)
一詩人の告白『私の衆讃歌』昭42・2 創文社(初出・わが詩集わが人生「読売新聞」昭39・8・16)
昔の仲間『尾崎喜八詩文集・10』(初出・同題『アルプ』昭46・3)
空と樹木『日光と枯草』昭52・10スキージャ</p> |
|---|--|

一ナル（初出・同題「神奈川新聞」昭47・12・22）

二つの星——ロラン、光太郎『音樂への愛と感謝』昭48・8 新潮社（初出・「音樂と求道」

感謝』昭48・8 新潮社（初出・「音樂と求道」

④「芸術新潮」昭43・4 「白樺」とベルリオーズ『音樂への愛と感謝』

（初出・「音樂と求道」）『音樂への愛と感謝』昭43・6

高田博厚との出会い『音樂への愛と感謝』（初出・「音樂と求道」）『芸術新潮』昭43・9

他氏による関連著述

千家元麿・六号雜感『愛の本』大6・10

手紙一つ（ローマ字文）RÖMAJI

今年の詩壇『東京朝日新聞』

大11・9

萩原恭次郎・先月の詩壇『炬火』大10・11

福田正夫・五月詩壇月評『日本詩人』大11・

土田杏村・現代作家論——空と樹木『詩聖』

大11・8

福士幸次郎・詩壇の人々——その作風と傾向と『文章俱樂部』大11・11

今年の詩壇『日本詩人』大11・

川路柳虹・詩壇の回顧『早稻田文學』大11・12

大藤治郎・大正一年の詩と詩人『新潮』大11・12

百田宗治・詩壇概観『文芸年鑑・大正一二年版』大12・1 —松堂書店

河井醉茗・一九一三年版『日本詩集』を読む

佐藤落葉・大地と光と草木の詩『日本詩人』

三川秀夫・人生を歌ふ詩人尾崎喜八君『新

佐藤惣之助・詩戯と懐旧——大正詩壇回想

井上康文・詩人回想録『若草』昭10・4

高田博厚・おもいで『アルプ』昭49・6

解説

特集『空と樹木』の成立前後を中心

大正十一年に、尾崎喜八は詩人としての最

初の成果、『空と樹木』を刊行、高村光太郎と

千家元麿に献じている。

尾崎は自己の詩人形成を顧みるとき、その

二人の先輩の名を敬愛の念をこめて挙げる。

高村光太郎とは生涯にわたり密接な交わりを

もち、尾崎はそのことを随處に述べ、又、夙

に知られている。一方、千家元麿との交流は

その意義の重要な割には整理されていないよ

うに思われる。

本資料一覧は、千家元麿との関わりに焦点

を置き、併せて尾崎の初期時代の解明の一助

として集録した。そして、資料群から主要な

問題点、「尾崎喜八の詩作の始まり」、「千家元麿との交流の発端から進展」について、以下

集約を試みた。

(1) 尾崎喜八の詩作の始まり

尾崎が詩を書きだしたのは、自筆『略年譜』（『尾崎喜八詩文集・3』。註II以後、本資料一覧に含まれているものは、出典を省略する）によると大正九年である。他氏制作の尾崎年譜も大正九年になつていて、一方、尾崎の著述に「略年譜」と異なつたところがあり、記述から推察して、それらを年代順に並べてみる。

・大正三年末以後（「其頃」）
・大正三、四年（「白樺」とベルリオーズ）
・大正四、五年（「運命を決したもの」）
・大正五年後半以後（「自伝——詩以前のもの」）
・大正七、八年（「一詩人の告白」）
・大正九年（「略年譜」）

これらは、大正四年前後と大正九年頃に大きく分けることができる。
（大正九年、詩作の始まり）

尾崎年譜の基本、『略年譜』によれば、大正九年の夏、半年ほどいた京城の朝鮮銀行を退職して帰国、再び高村光太郎を訪ねる。そして、光太郎の感化で「ヴェルアーランの詩を真剣になつて読み、自分で詩を書きはじめ」たのである。それは改めて「詩に邁進しよう」と固く心をきめ（「第一詩集の頃」）た転機であった。

四月に、「白樺」に「朝鮮詩二つ」（在鮮中の作）を寄稿、詩篇では初めての掲載となつた。その後、旺盛な詩作をみせていることか

ら、大正九年に書きはじめた、という記述は妥当であろう。

〔大正四年前後、詩作の始まり〕

大正四年前後を示す一つに、「運命を決したもの」がある。その中で、「詩は高村さんと千家さんとの私淑から学」び、「武者小路さんや長与さんから声援されていよいよ本気になつて書き出し」という。そして、武者小路実篤が小説『彼が三十の時』を刊行した頃には、詩作を試みていたエピソードがある。『彼が三十の時』は大正四年二月に出版され、ついで、時期を推定する基準の一つになる。

尾崎が高村光太郎の人と芸術に憧れ、知遇を得るようになるのは、明治の終わりから大正の初め、二十歳から二十一歳（数え年、以下同じ）にかけてであり、以後の進展は大方知ることができ。一方、千家元麿の私淑については、直接触れた資料が乏しい。

尾崎が千家元麿の詩に接するのは、いつ頃からであつたか。元麿は大正二年十一月に、『白樺』の傍系誌に変貌する「エゴ」を佐藤惣之助らと創刊する。元麿は初めのうち詩篇を寄せていたが、翌三年四月からは発表していない。

その後大正五年三月に、「善の生命」に十四篇の詩を発表してから再び活発に書いて、大正七年五月に第一詩集『自分は見た』を刊行した。尾崎は元麿の詩を「自分は見た」が刊行される前に読んでいた（ヒューマニズムの詩と詩人）ことから、元麿の詩に接するものは大正五、六年であろう。

私淑が、作品を対象とするばかりでなく、面前の相手から得ることがあるとすれば、元麿との出会いを確かめなければならない。

「略年譜」の大正五年に、「長与善郎氏の厚意でしばらくその赤坂の家に寄宿」し、その間に元麿を含め、「白樺」の同人や傍系の人達を知った、とある。つまり元麿から直に感化を受ける機会ができたのである。

ところで「略年譜」では、長与宅に寄宿したのは大正五年であるが、編者は前年の四年と考へる。

大正四年に、尾崎は文学志望と恋愛問題で父との不和が昂じ、廃嫡の身となつて家を出た。秋のことである（『白樺』とベルリオーズ）。本郷に下宿し、勤めもやめて方々訪れて過す。その中に武者小路実篤を鵠沼に訪ねた（『白樺』とベルリオーズ）こともあつた。実篤は大正四年の一月から八月にかけて鵠沼にいたから、その間のことであろう。

それと関連する資料に「エゴ」の寄稿がある。千家元麿らの「エゴ」が大正四年九月に復刊し、尾崎は十月号に、戯曲「運命と人々」を発表する。尾崎はそれに、「此の拙き一篇を武者小路実篤兄、長与善郎兄並に小泉鉄兄に捧ぐ」という献辞を付けている。そして次の十一月号には、小説「巨いなる者の手」を書き、明らかに長与の家に居る、と想わせることがある。この「エゴ」の二点は、尾崎と長与との交流や寄宿の時期を傍証して、大正四年九月から十月のことであろう。

以上から長与宅に寄宿する時期が分つた。しかし、そこに至る経緯は不明である。ところで先に挙げた武者小路実篤から志賀直哉にこの後に、木下利玄の短い挨拶があり、三

人の寄せ書がある。「木」は木村莊八だろうか。

文面にある尾崎が、即尾崎喜八といえない。

しかし、尾崎の鵠沼訪問の記述から、尾崎と認めても大きな間違いではないだろう。実篤は九月の初め（無車「六号雑記」「白樺」大4・10）には東京・千駄ヶ谷に移つており、このハガキの日付と併せて、尾崎は八月には家を出していた、と考えられる。

一方尾崎と千家元麿との交流を結んだ長与善郎宅での寄宿について、その経緯は明らかでない。長与善郎は、大正三年六月に結婚して麻布広尾に住み、後、赤坂区台町に移り、大正四年九月に赤坂区福吉町に移っている。尾崎が寄宿したのは赤坂福吉町の家（『白樺』とベルリオーズ）であるから、大正四年九月以後のことであろう。

それと関連する資料に「エゴ」の寄稿がある。千家元麿らの「エゴ」が大正四年九月に復刊し、尾崎は十月号に、戯曲「運命と人々」を発表する。尾崎はそれに、「此の拙き一篇を武者小路実篤兄、長与善郎兄並に小泉鉄兄に捧ぐ」という献辞を付けている。そして次の十一月号には、小説「巨いなる者の手」を書き、明らかに長与の家に居る、と想わせることがある。この「エゴ」の二点は、尾崎と長与との交流や寄宿の時期を傍証して、大正四年九月から十月のことであろう。

以上から長与宅に寄宿する時期が分つた。しかし、そこに至る経緯は不明である。ところで先に挙げた武者小路実篤から志賀直哉に

出したハガキの文面に、長与 小泉 岸田 等の名前がある。ここでは当然、長与善郎、小泉鉄、岸田劉生であろう。その寄せ書の文脈から、尾崎が実篤を訪問した日、或は前日に、長与や小泉達も来ていた、と思われる。それならば、尾崎は実篤を介して、長与や小泉と会った、と十分考えられる。その一ヶ月余り後、尾崎は「エゴ」十月号に、「運命と人々」を書き、武者小路実篤、長与善郎、小泉鉄の三人に捧げている。「運命の人々」は、初めて文芸誌に出た作品である。それに三人の名前を挙げて捧げたことは、余程の感銘や謝意があつたからだろう。おそらく鵠沼での出会いや殊に長与には寄宿の感謝が含まれていただろう。尾崎は鵠沼で長与と会わなかつたとしても、実篤は九月に入ると東京に移っているから、長与への橋渡しをしてくれたことだろう。いずれにしても実篤の存在がはたらいている、と考えられる。

廢嫡一家を出た後の変転は、幸運にも長与との交流をもたらし、これまでの高村光太郎や高橋元吉の他に、新たに千家元麿や「白樺」の人達を知ることになった。実篤は、その頃の仲間のことを『或る男』(大12)の中で次のように書いている。

「志賀は短篇作家として第一流、長与は日本に類のない大きな脚本『項羽と劉邦』(白樺)大5・9~6・4 編者註、以後同じ)、岸田は画家としての天才を露骨に示して来た、千家は又すばらしい詩を書き出した(『善の生命』大5・3-)、倉田は『出家とその弟子』

を千家のやつてゐる雑誌(『生命の川』大5・11~6・3掲載)に送つて來た、実篤自身は小泉鉄、岸田劉生であろう。その寄せ書の文脈から、尾崎が実篤を訪問した日、或は前日に、長与や小泉達も来ていた、と思われる。それならば、尾崎は実篤を介して、長与や小泉と会つた、と十分考えられる。その一ヶ月余り後、尾崎は「エゴ」十月号に、「運命と人々」を書き、武者小路実篤、長与善郎、小泉鉄の三人に捧げている。「運命の人々」は、

初めて文芸誌に出た作品である。それに三人の名前を挙げて捧げたことは、余程の感銘や謝意があつたからだろう。おそらく鵠沼での出会いや殊に長与には寄宿の感謝が含まれていただろう。尾崎は鵠沼で長与と会わなかつたとしても、実篤は九月に入ると東京に移つてゐるから、長与への橋渡しをしてくれたことだろう。いずれにしても実篤の存在がはたらいている、と考えられる。

廢嫡一家を出た後の変転は、幸運にも長与との交流をもたらし、これまでの高村光太郎や高橋元吉の他に、新たに千家元麿や「白樺」の人達を知ることになった。実篤は、その頃の仲間のことを『或る男』(大12)の中で次のように書いている。

「志賀は短篇作家として第一流、長与は日本に類のない大きな脚本『項羽と劉邦』(白樺)大5・9~6・4 編者註、以後同じ)、岸田は画家としての天才を露骨に示して来た、千家は又すばらしい詩を書き出した(『善の生

(20)、松方三郎(18)。

さて、長与善郎宅に寄宿していた期間は定

かでない。大正五年十二月に刊行した『近代音楽家評伝』に、「長与善郎君の家庭にありし日の記念のために」と、献辞を付けている。

『日本武尊』(『中央公論』大6・1)を書いてゐたと書き、大正五年から六年にかけて、成長した仲間の動静を記録している。

尾崎はその間、前述したように、大正四年十月号の「エゴ」に文芸誌として初めて作品を発表、翌五年四月には、「白樺」に初寄稿となる、ロマン・ロランの「ベルリオツ論」

を訳載する。そして、五年十月に元麿らが創刊した「生命の川」に参加、五年十二月には、「白樺」に連載したロマン・ロランの翻訳をまとめ、『近代音楽家評伝』として洛陽堂から処女出版する。こうして尾崎自身、「白樺」の先輩達の活躍を目撃しながら時代を共有する。

尾崎は年を経て、大正十一年に住んでいた「蛇窪から」の中で、千家元麿や佐藤惣之助のことを思い、「二十四、五の時分の事をよく考へ出す」と吐露している。二十四、五歳、つまり前述の交流をもち始めた頃の、客気に富んだ大正四、五年のことである。

因に、「白樺」の高揚期にあつた大正五年当時、交流があつた人々の年齢(数え年)を付しておく。

高村光太郎(34)、志賀直哉(34)、武者小路実篤(32)、千家元麿(29)、長与善郎(29)、柳宗悦(28)、小泉鉄(28)、佐藤惣之助(27)、岸田劉生(26)、倉田百三(26)、尾崎喜八(25)、木村莊八(24)、高橋元吉(24)、椿貞雄(21)、犬養健(21)、近藤経一

これまで「詩作の始まり」を明らかにするために、千家元麿との私淑や交流の発端、それに関わる長与宅寄宿に小考を費すことになった。それらを踏まえ「詩作の始まり」を検討する。

「詩作の始まり」が大正四、五年とみなす資料として、「運命を決したもの」「『白樺』とベルリオーズ」を冒頭に挙げた。

「運命を決したもの」にある、実篤、長与に声援され、本気になつて書きだした時期は、既述の経緯から長与宅に寄宿している頃であ

ろう。そして、実篤が『彼が三十の時』(大4・2)を刊行して間もない頃には書いていたから、大正四年春頃とみられる。

『白樺』とベルリオーズによれば、勤めのかたわらに詩や小説様のものを書いていたのを文学嫌いの父に見られている。その後、廃嫡になつたから、大正四年秋以前に詩を書いていたことになる。

私淑した一方の高村光太郎との交流の中では如何であつたか。光太郎との交流について、戦前、初めて明したという「其頃」がある。

尾崎は、大正二年、三年と経るにつれ、光太郎訪問は深まり、話の中で詩や芸術の本質を教えていた。大正三年十一月(十月とする記述あり)、光太郎が出したばかりの詩集『道程』を尾崎の勤め先に届けた。尾崎はその折の感激を述べた後に、「それから私は自分で詩を書き始めた。見て貰ふのは高村君一人だつた」と書いている。大正三年の終わり以後のことであろう。

これらのことから尾崎の詩作は、光太郎の『道程』に触発されて大正二年末頃から芽生え、やがて光太郎一人だけでなく、実篤や長与に励まされ、大正四年末頃から詩作の意欲が膨らんだ、といえる。ここに「詩作の始まり」、つまり習作期をみるとことができる。

ここで先に出てくる勤め先について触れておきたい。丸ノ内の高田商会である。

前に勤めていた三省堂器械標本部は、大正二年二月の神田大火で類焼した。そのため器械標本部は閉鎖(『三省堂の百年』)されて退

職する。その後、同年末(編者は、「エゴ」掲載の「巨なる者の手」「愛の創作」の記述から、それより早い四月とみる)に高田商会に就職する。二十二歳であつた。そして、大正四年の秋、廃嫡になる前まで勤めている。

ところで高田商会に勤めていた大正三年(二十三歳)のことに触れておきたいことがある。詩作との関わりは、高村光太郎・『道程』の件りで述べたが、「略年譜」に武者小路実篤との興味深い交流が述べられている。

尾崎は実篤をまねて短い小説様のものを書くようになり、同じ勤め先(高田商会)の塚田隆子との恋愛を書いたものを実篤に見て貰つてゐる。しかし、そこに至るまでの交流は不明である。

明治四十四、五年、三省堂器械標本部に勤めたことで知つた高橋元吉に、「白樺」を奨められて読むうちに、実篤の書くものに惹かれる。

中でも『生長』(大2・12刊)、「白樺」に掲載された感想集)を愛読して、「自己の感じたことを最も直接法に自由に」(『生長』自筆広告文)表わすその書き方は、若輩にも「おのれを偽りさえしなければ自分たちにも書ける」という氣をさせた(『二つの星』『音樂への愛と感謝』)のである。

回覧雑誌について尾崎の記述は見当らないが、「エゴ」に掲載された小説「巨なる者の手」(大正4・11)「愛と創作」(大5・1)の中に、回覧雑誌のことが出てくる。

主人公(尾崎)は二十二歳(大正二年)の春に入った会社(高田商会)で、数人の文学愛好者と回覧雑誌を始め、毎月一回、原稿を綴じて回覧する。主人公は翻訳、創作、感想(当時、実篤らがよく書いている)等を発表、同人等の頭株、等と記述されている。この主人公と、実篤の「若い人」と似ているところがある。

この高田商会で、尾崎がミニ「白樺」のようないい回覧雑誌をやつていたことを、当時一緒に高田商会で、尾崎がミニ「白樺」のよ

てくる。若い人はこの頃、彼(実篤)の處へ時々来る。その人は仲間と回覧雑誌をやっていて、仲間の人は皆彼(実篤?)。尾崎?に厚意を持っている。若い人は彼(若い人)の処を書いたものだ、等が書かれている(註)。この小説の叙述にある「彼」は、原則として実篤である。特に他者を指すので判読した)。これだけのことならば、若い人が尾崎である、といいきれない。この若い人の訪問は、前後の章の出来事から、九月上旬から半ば頃までのことである。小説の若い人の訪問時期と、「略年譜」の実篤に自作を見て貰つた時期とは、第一次世界大戦の開始の思いと照らし合わせて、ほぼ同じ頃である。その折、若い人が読んだ文章が回覧雑誌のものは分らない。

に勤めていた今井武夫が「詩兄尾崎喜八の回想」(「アルプ」昭和49・6、尾崎喜八追悼特集)の中で書いている。また、早くからの友人、井上康文が「詩人回想録」の中で触れている。これらのことや前述の「エゴ」の小説の記述等からして、大正二、三年に、高田商會の文学仲間と回覧雑誌をつくったことは確かであろう。そして、回覧雑誌によつて青年尾崎の自己表現が開かれ、光太郎とは違つた実篤との交流が芽生えたこと等、意義深い。

ところで回覧雑誌の記述に、「詩」或は「詩作」について触れたところがない。このことは、詩作を始めた時期が、先の光太郎との交流の中で分つた時期より早くないことを示すことになる。

かくして尾崎が、「白樺」という個人主義的人道主義の雰囲気の中で、「勤めのかたわら詩を書いたり短い小説ようのものを書いたりしていた」(『白樺』とベルリオーズ)時期は、就中詩に於て、これまでの小考から、大正三年末以後とみられる。そして、「白樺」の影響は、誌上から受けとるばかりでなく、武者小路実篤との直の交流が含まれていることを大正三年の文学行動は示している。

ここで、これまでの武者小路実篤の扱い方について述べておきたい。

大正四年に、尾崎が千家元麿や長与善郎らと親しくなることができたのは、実篤の存在に負うところと既述した。その際、「詩作の始まり」の観点から元麿、長与らとの関連に重きをおき、間に立つた実篤との関わりは煩

雜を避けて触れなかつた。その上、実篤との交流は、「詩作の始まり」に止まらない広範囲かつ根本的意義を孕んでおり、本稿とは別に考えることにしておいたのである。

尾崎は、明治の終わり四十四年頃に、高村光太郎や高橋元吉を知り、「白樺」などを読み始めて、ヨーロッパ芸術に感化された新風の文学に惹かれていく。その時を尾崎は「生涯の転機の一つ」(略述的略年譜)歴程昭33)といつた。そして、大正三年にかけて二十歳から二十三歳の頃を「芸術的幼虫時代」(若き日の友の姿)『尾崎喜八詩文集・9』と名付けている。その間における武者小路実篤は高村光太郎とともに、尾崎の文学行動の指標であり、栄養であつた。かかる点から先述したように、改めて考えたい。

(2) 千家元麿との交流の進展

尾崎の「詩作の始まり」は、これまでではぼ明らかになつた。そして、それと入り組みながら千家元麿との交流の発端も分つてきた。そこで以後の元麿との交流が及ぼした尾崎の詩作について、まとめてみたい。

大正四年秋頃に、長与善郎宅で知り合つてから、尾崎は元麿の人間性や詩に惹かれ、互の往来も加わつて、交流は一層深まる。

大正五年十月に、元麿らによつて「生命の川」が創刊された。武者小路実篤、佐藤惣之助、木村荘八、犬養健ら旧「エゴ」や「白樺」の人達に、倉田百三、高橋元吉らが加わつてゐる。

尾崎は、創刊号に小説「祖母の回想」(未見)を書き、大正六年六月の最終号に、「女のトルソ」「大煙突」(尾崎喜八資料・4収録)の詩二篇を発表している。これまでの探索の中で、最も早い作品で特筆すべきことである。尾崎が詩を「武者小路さんや長与さんらに声援されて本氣(傍点編者)になつて書き出した」(運命を決したもの)頃と、元麿が再び書き出した時期とほぼ重なつている。その頃には尾崎は元麿を知つていたから、元麿の生気に満ちた詩作を目の辺りにして、創作欲を刺戟されたことだろう。かつて実篤の率直な文章から書く意欲を触発されたように、元麿の純朴な詩作から眼を開かせられた、と容易に想像できる。

「女のトルソ」は、当時、高村光太郎訳編の『ロダンの言葉』(大5・11)が刊行され、尾崎のロダンへの関心が厚かつたことによるのだろう。「大煙突」は戦前の五月の風景で、塚田隆子と歩いた所である。興味深いのは、尾崎が好んだ雲が背景に描かれている。二作とも幸福な時を示している。

尾崎は、「生命の川」に二篇の詩を書いた後、大正九年まで詩作の跡がみられない。その間、高村光太郎の感化を受けながらホイットマンやヴェルハーランの詩を知り、「白樺」にも寄稿していたが殆ど訳業であつた。尾崎の自筆年譜類をみても当時のことは、塚田隆子との恋愛問題で大方占められている。

一方、千家元麿との交流の記録も乏しい。

元麿は「生命の川」の後、「愛の本」を創刊

している。大正六年十月号の「六号雑感」の中

で、尾崎が訳している「ベルリオの手記」に好感を寄せている。その後、「虹」(大8・9)『野天の光り』(大10・4)を刊行している。尾崎はこれららの詩を愛読していたから、たとい交流の記録が見られないとしても続いたことだろう。

尾崎は、元麿の第一詩集『自分は見た』(大7・5刊)を武者小路実篤宅で贈られた(『空と樹木』)、という。元麿の詩集が出た頃、実篤は我孫子に住んでいた。しばらくして実篤は宮崎の「新しき村」へ移る。その送別会が九月二十一日に、我孫子の実篤宅で行われ、近くの志賀直哉、柳宗悦を始め、「白樺」の人達とともに元麿も尾崎も同席(『武者小路実篤全集』月報17・小学館、平8)している。或はその折に貰ったかもしれない。

さて大正九年の秋以降、『空と樹木』の時代に入った尾崎は、詩作を「おのれを生かす文学的創造の道」(第一詩集の頃)と心に決め、詩人の気概をもつにいたつた。尾崎が言うところの「生涯の二度目の転換期」(第一詩集の頃)である。

かかる詩人の自覚から生まれる作品と、「生命の川」以前の未発表作とは自ら決定的な相違があるだろう。尾崎が「略年譜」で、「詩作の始まり」を大正九年としたのは冒頭で述べたように妥当かもしれない。しかし編者は、「生命の川」以前の詩作は敬愛した先輩詩人の有形無形の感化の集積で、論を俟つまでもなく無視できない。習作期の存在と意義を認

めたい。

大正九年の夏に、尾崎は朝鮮から帰国して落着くと、再び「白樺」に「ベルリオの手記」を訳載する。そして、新たな決意のもとに秋からみせる詩作は、持ち前の情熱と努力で噴き出し、折から続出した詩誌に発表する機会に恵まれる。加えて、大正十年の末に移った郊外の蛇窪には、囁く自然が豊富にあり、健気に生活する人々と接することができ、尾崎の創作欲を一層高めることになった。

尾崎の努力の成果は、一年余の大正十一年五月、最初の詩集『空と樹木』となつて現われる。第一部「我がリトム」、第二部「空と樹木」の構成で、「我がリトム」を高村光太郎に、「空と樹木」は千家元麿に捧げた。尾崎は、当時の詩生活について、「蛇窩から」に書いている。その中で、元麿との交流を若い日に遡り、感慨深く記している。献呈には、それまでの交流の感謝や成果を記念する思いがこめられている。

尾崎が元麿へ捧げた詩篇は、『空と樹木』の他にもある。

大正十一年四月に「日本詩人」に発表した「彫刻」を始めとし、「白樺」には大正十一年十二月に「海」、大正十二年四月に「もつと深い自然の中へ」と続けている。

これらら献辞付き詩篇とは別に、大正十二年五月に「千家元麿君の詩について」を講演、同年八月には評論「千家元麿君の芸術に就て」を「日本詩人」に書いている。講演は「白樺」の兄弟誌「生長する星の群」(新しき村出版)が開催した文芸講演会で行つた。他に柳宗悦「信仰について」、武者小路実篤「素直に見る事」があり、いかにもその人らしい話を想わせる。

尾崎は、「白樺」に詩を発表していた頃、「千家元麿さんに一番傾倒していた」(ヒューマニズムの詩と詩人)と言う。「白樺」には、大正九年の朝鮮で書いた詩を除き、大正十一年七月から十二年四月にかけて八回、十五篇の詩が掲載されている。この時期は、先の元麿へのオマージュを続けて表わした時期とはほぼ重なっている。

一方、元麿も尾崎から贈られた『空と樹木』の返礼を珍しいローマ字文(本「資料」掲載)で書き、率直な感想を披瀝している。

尾崎が第一詩集『空と樹木』を出した頃の元麿との交流は、先にみた通り、実に濃密である。そのオマージュは高村光太郎の他にはみられないほどで、しかも『空と樹木』の前後に集中し、尾崎のいう当時の傾倒の強さを物語っている。そして、元麿、尾崎、二人の作品に表われた自然や人間生活に寄せる感動の眼と愛は、ともに相通じる詩心を思わせる。これらら元麿への傾倒や詩心の共鳴は、『空と樹木』が成立する一半の役割を担つていているだろう。

『空と樹木』の時代を経て、千家元麿と尾崎喜八の交流は徐々に変化する。

大正十二年九月一日の関東大震災を境に、「白樺」は終刊し、尾崎自身も蛇窩で知り合つた水野実子と結婚、高井戸で新生活に入った。

尾崎はその後も元暦らの同人誌に寄稿しているが、元暦についての記述は、大正十五年八月に「詩集『夏草』を読んで」を書いてから途切れ、献呈詩も『曠野の火』（昭2）に収録した「麦」以降見られない。

年譜『武者小路実篤全集・18』平成3・4
小学館

（文中敬称略）

尾崎は、一方で、大正十一年六月二十四日付のロマン・ロランからの『空と樹木』の返札を受取り、それからロランへの傾倒とともに、新たにヨーロッパの詩人達を知るに及んで、次第に独自性を表わしてくる。

翻つて、尾崎の全詩業を考えるとき、『空と樹木』の時代で高村光太郎、千家元暦の感化のもとで培った自然と人間生活への濃やかで熱い感動の詩心は、一貫して失われていなことを指摘しておきたい。

終わりに、本小考は、資料の整理として記録性に主眼をおいたことから、交流がもたらした作品への影響には触れなかった。その比較照合を加えることで交流の意義が、より鮮明になろう。そして、記録の整合を求めるために遡及的になり、記述が煩雑になつたことを許していただきたい。

参照文献

- 年譜（紅野敏郎編）『千家元暦全集・下巻』昭40・10 弥生書房
長与善郎年譜（紅野敏郎編）『現代日本文學大系・36』昭46・2 築摩書房
年譜 武者小路実篤・長与善郎他（紅野敏郎編）『明治文学全集・76 初期白樺派文学集』昭48・12 築摩書房

高層雲の下

尾崎喜八 詩集



新詩壇社 東京 1924

詩集『高層雲の下』（大正十三年六月十六日、新詩壇社刊行）のカバーの写真。「喜八の眞の意味での出発があつたと思われる上高井戸の小さな家の前に立つ肖像写真」と伊藤海彦が評したもの。それは千家と尾崎のもつとも親密に行き來した時期でもあつた。千家と尾崎が同時に写っている写真は、意外にもほとんどないので、これを掲載した。

尾崎喜八とフランスの作家たち

——喜八宛書簡を通して—— その二

中原好文

前号では、「序」として、尾崎喜八と筆者との関係、喜八宛フランス作家たちの書簡のもつ意味について触れ、最後にデュアメール書簡二通を紹介した。本号ではシャルル・ヴィルドラック書簡の最初の数通を翻訳紹介するが、その前に、それぞれの書簡の年代関係を知るために、みすず書房版ロマン・ロラン全集中の『日本人への手紙』に蛭原徳夫によつて既に訳載されている喜八宛ロマン・ロラン書簡二十通を含めた「尾崎喜八宛フランス作家書簡日付け一覧」を掲げる。

尾崎喜八宛フランス作家 書簡日付け一覧

(尾崎喜八宛ロマン・ロラン書簡の日付けを含む)

- | | |
|--|--|
| 一九二三年（大正十一年）六月二十四日——
ロマン・ロランからの最初の書簡
一九二二年（大正十一年）十一月一日——
マン・ロラン書簡
一九二二年（大正十一年）十二月十日——
マン・ロラン書簡

一九二三年（大正十二年）四月九日——ロマ
ノ・ロラン書簡

一九二四年（大正十三年）十二月二十一日
——ロマン・ロラン書簡

一九二四年（大正十三年）（日付け無し）
——ロマン・ロラン書簡

一九二六年（大正十五年）七月十七日——シ
ャルル・ヴィルドラック書簡

一九二六年（大正十五年）六月二十八日——
ロマン・ロラン書簡（尾崎喜八・
片山敏彦宛） | 一九二五年（大正十四年）八月十四日——ロ
マン・ロラン書簡

一九二五年（大正十四年）十二月十六日——
ロマン・ロラン書簡

一九二六年（大正十五年）二月十六日——ロ
ートアブフェル出版社書簡

一九二六年（大正十五年）三月、復活祭——
ロマン・ロラン書簡

一九二六年（大正十五年）五月十二日——シ
ャルル・ヴィルドラックからの最
初の書簡（日本滞在中、旅先の京
都から出されたもの）

一九二六年（大正十五年）五月二十二日——
シャルル・ヴィルドラック書簡
（日本滞在中、宿泊先の東京帝国
ホテルから出されたもの）

一九二六年（大正十五年）六月四日——シャ
ルル・ヴィルドラック書簡（帰国
の途次、朝鮮の京城から出された
もの） |
|--|--|

一九二五年（大正十四年）八月十四日——ロ
 マン・ロラン書簡

 一九二五年（大正十四年）十二月十六日——
 ロマン・ロラン書簡

 一九二六年（大正十五年）二月十六日——ロ
 ートアブフェル出版社書簡

 一九二六年（大正十五年）五月十二日——シ
 ャルル・ヴィルドラックからの最
 初の書簡（日本滞在中、旅先の京
 都から出されたもの）

 一九二六年（大正十五年）五月二十二日——
 シャルル・ヴィルドラック書簡
 （日本滞在中、宿泊先の東京帝国
 ホテルから出されたもの）

 一九二六年（大正十五年）六月四日——シャ
 ルル・ヴィルドラック書簡（帰国
 の途次、朝鮮の京城から出された
 もの）

ルタ・シュライヒヤー書簡。恐らくは、ロートアーフエル出版社の書簡と同年度のもの？

一九二七年（昭和二年）四月一日——シャルル・ヴィルドラック書簡

一九二七年（昭和二年）五月四日——マルセル・マルチネ書簡

一九二七年（昭和二年）六月三日——ロマン・ロラン書簡（尾崎喜八・片山敏彦・尾

宛）

一九二七年（昭和二年）八月二十七日——リュック・デュルタン書簡（尾崎喜

八・片山敏彦・今井武夫宛）

一九二七年（昭和二年）八月四日——マルセル・マルチネ書簡

一九二七年（昭和二年）九月二十五日——シャルル・ヴィルドラック書簡

一九二七年（昭和二年）十二月（日付けは不明）——シャルル・ヴィルドラック書簡

一九二八年（昭和三年）一月一日——ロマン・ロラン書簡

一九二八年（昭和三年）二月三日——マルセル・マルチネ書簡

一九二八年（昭和三年）二月六日——シャルル・ヴィルドラック書簡

一九二八年（昭和三年）一月十七日（？）——シャルル・ヴィルドラック書簡

じめ、フランスの作家・詩人たち

の寄せ書き

一九二八年（昭和三年）三月二十日——ロマン・ロラン書簡

一九二八年（昭和三年）五月一日——マルセル・マルチネ書簡（片山敏彦・尾

崎喜八・上田秋夫宛。フランスにおける未刊行詩九篇を含む）

一九二八年（昭和三年）五月三日——ロマン・ロラン書簡

一九二八年（昭和三年）五月十五日——ロマン・ロラン書簡

一九二八年（昭和三年）七月十日——シャルル・ヴィルドラック書簡

一九二八年（昭和三年）八月二十九日（？）——マルセル・マルチネ書簡（上

田秋夫の手紙に同封されたもの）

一九二八年（昭和三年）九月八日——ロマン・ロラン書簡

一九二八年（昭和三年）九月十一日——マルセル・マルチネ書簡

一九二八年（昭和三年）十月十八日——ロマン・ロラン書簡

一九二八年（昭和三年）十一月三日——ベルタ・シュライヒヤー書簡

一九二八年（昭和三年）十二月二十日——シャルル・ヴィルドラックはじめ、

フランスの作家・詩人たちの寄せ書き

一九二九年（昭和四年）六月二十九日——マ

ルセル・マルチネ書簡

一九二九年（昭和四年）（日付け不明）——シャルル・ヴィルドラック写真

一九三〇年（昭和五年）四月六日——ベルタ・

シュライヒヤー書簡

一九三〇年（昭和五年）六月二十三日——ロマン・ロラン書簡

一九三〇年（昭和五年）十一月二十二日——ジョルジュ・デュアメル書簡

一九三一年（昭和六年）五月六日——マルセル・マルチネ書簡

一九三一年（昭和六年）六月一日——シャルル・ヴィルドラック書簡

一九三一年（昭和六年）六月一日——ロマン・

ジュー・デュアメル書簡

一九三一年（昭和六年）六月十七日——マルセル・マルチネ書簡

一九三四年（昭和九年）一月初旬（？）——シャルル・ヴィルドラック書簡

（「昭和九年二月五日受信」の書き込みあり）

一九三四年（昭和九年）一月十六日——ジャン・ジオノ書簡

一九三四年（昭和九年）四月二十二日——ロマン・ロラン書簡

一九三六年（昭和十一年）六月六日——ジャ

ック・ドラマン書簡（ジャック・

ドラマン宛尾崎喜八書簡のタイプ

打ち原稿がある）

喜八宛ヴィルドラック書簡

（1）

（その1）

一九三七年（昭和十二年）十一月十日——ジ

ヤン・ジオノ書簡（長女誕生通知
の名刺を含む）

一九四八年（昭和二十三年）十一月二十二日

——マリー・ロラン書簡

一九五三年（昭和二十八年）十月三日——ブ

ランシユ・デュアメール書簡

ヘルマン・ヘッセ等ドイツの作家や、先に述べたような、所在不明のフランス作家や詩人たちの書簡を除き、現存する喜八宛書簡の概要と日付けの一覧は以下の通りである（レオン・バザルジエットからの書簡も、いずれその年代を特定した上で、この一覧表に加えられた）が、それらの書簡群は、ロマン・ロランからは「私の息子」として、シャルル・ヴィルドラックからは、「私の兄弟にして甥」として、ジャン・ジオノからは「私の兄弟」として愛された日本の一詩人の、或る時代についての新たな相貌を浮かび上がせるに違いない。

にもそのような表記の用いられているものが（ある）フランス人の発音することのない「」を意識的に省いた結果であろうか？

「註解」喜八は『音樂への愛と感謝』の第四章「精神の音樂」の中の「ヴィルドラックの死」の節において、書棚に彼の写真を飾り、花を供えてその死を悼むとともに、彼の著作の数々に触れた後で、こう記している。

「もしも今の私に彼に似た處があるとしたら、弧内は傍線部誤植の訂正を示す。以下同様」である。

〔発信地〕京都・消印判読不能

一九二六年五月十二日

親愛なる尾崎

私たちには京都におりますが、ありとあらゆる美をふんだんに備えた実に素晴らしい風光の中で、この麗しい町に魅せられています。あなたのことをお忘れることはございません。二人からのお心からなる挨拶をお送りします。

シャルル・ヴィルドラック

ローズ・ヴィルドラック

また、シャルル・ヴィルドラック夫妻の日本訪問については、「尾崎喜八詩文集」第三卷（略年譜）二四〇頁、また日本橋ソーダ・ファウンテンにおけるその歓迎宴については「尾崎喜八資料」第十号二頁、上高井戸尾崎家へのその訪問については同号三頁を参照されたい。またロマン・ロランは一九二六年復活祭に書かれた喜八宛書簡（みすず書房版「ロマン・ロラン全集」第三十六巻『日本人への

手紙』四一四、四一五頁)で、次のように記

している。

22／10—11。

「」れを書いている今頃には、詩人である私の親しいシャルル・ヴィルドランクがあなたがたのお仲間になつてゐるだろう、と思つてあります。彼の日本での短い滞在ちゅうに、あなたがたが彼に会い、話をしておられたらよいが、と念じています。すでに倉田百三には彼のアドレスをお知らせしましたが、もう一度あなたがたにもお知らせします。

東京市大森区新井宿河原作四六一 R・川

島方

ヴィルドランクはジョルジュ・デュアメルの義兄弟で、フランスの最も人間的な詩人の一人であり、最も自由な人物の一人でもあります。私は彼を尊敬し、愛しています。彼が私の使者としてあなたがたのところへ行つたことをうれしく思っています」(蛇原徳夫の訳による)。なお、ヴィルドランクはデュアメールより一歳年長で、デュアメールの姉ローズ・デュアメールと結婚している。

(その2)

「宛先その他」府下豊多摩郡上高井戸字原尾崎喜八様(これは封書で、川島氏によるものと思われる宛名の他に、ヴィルドランク自身による〈M. Ozaki〉なる宛名書ある)。The Imperial Hotel of Tokyo(東京帝国ホテル)の便箋使用。

[発信地] 不明・消印 東京中央／15・5・

お金いしたお友達の大半と再会出来るものと考えてよろしいわけですね? ご友人の高田、高山それに吉田からとても心のこもつた手紙を受け取りました。昼食をこ一緒に出来ないことをお詫び致しますが、でも午後中ずっと一緒に過ごせるわけですし、晩もあります。そのことを大変嬉しく思っています。私たちは五月三十日に日本を離れます。でもこれからはお知り合いのわくですから、親愛なる尾崎、手紙を書き合うことで、一緒にいられるわけです。

それでは来週木曜日に。心をこめて

シャルル・ヴィルドランク

* 片山Katayamaの誤りであろう。Kと書き出され、それが消されて、Takayamaと書かれている。

(その3)

「宛先その他」日本東京府豊多摩郡上高井戸原尾崎喜八様(ローマ字でSamaとやっている)。用いられている絵葉書の写真説明は「京城朝鮮ホテル構内圓(判読不能。あるいは圓かも知れないが、意味からいて圓と思われる) 出壇：“Temple of Heaven” in the grounds of the Chosen Hotel Keijo(Seoul) Chosen(裏面はHOTELS and DINING CAR SERVICE under (under) the management of the Government Railways of Chosen. 等の印刷があるが一部判読不能)」

[発信地] 記述無し。消印 六月五日、午前

十時—十一時以外は判読不能。

一九二六年六月四日

親愛なる尾崎。美しい感動的な詩に衷心よりお礼申し上げます。もう何度読み返したことでしよう！出来ればすぐにもフランスの小さな我が家に飛んで帰り、あなたにご返事をしたため、懐かしいあなたの思い出と親しく向かい合いたいと思うこと切です！私たちはあなたがたお三人と可愛らしい娘さんが、日曜日の晩、駅を出て、そちらの、畠中の小道を戻つて行く姿を心の中で追いかけたのでした！私たちはいま奉天（現在の遼寧省の省都瀋陽市）に向かつて走る列車の中です。あなたに心からのかようならと搖るぎない友愛の気持ちを、あなたがた全員に友愛のしるしを、そして私の可愛らしい姪にご挨拶をお送りします。

伯父ヴィルドラック
ローズ・ヴィルドラック

* * * 書簡末尾の署名については、単に、「シャルル・ヴィルドラック」と記されているもの（連名の場合夫人の署名はすべて「ローズ・ヴィルドラック」である）、この場合のように、「伯父ヴィルドラック」と書かれているもの、「あなたの友シャルル・ヴィルドラック」、「あなたの忠実な友にして伯父シャルル・ヴィルドラック」等があるが、前述の「ヴィルドラックの死」で喜八が触れているように、一九二九年の日付けのある写真には

「私のきわめて親しい友らであり、甥であり姪であるオザキ・キハチとミツコに」と記され、「シャルル・ヴィルドラック」の署名がある。従つて、この「私の可愛らしい姪」は實子夫人を指し、「あなたがたお二人と可愛らしい娘さん」は實子の妹、水野久枝を指す。

（その4）

〔宛先その他〕シベリア経由・東京府豊多摩郡上高井戸原尾崎喜八様。用いられている絵葉書の写真は、パリ、コンコルド広場の大噴水。

〔発信地〕パリ。消印　パリ一一五・サン＝ペール街局、一九二六年六月二十三日十九時。

親愛なる友らよ、シベリア鉄道経由のまでは安樂で迅速な旅行の後、再びパリに帰つて来ました。自宅に戻りましたら、心をこめたご挨拶をお送り致します。私たちは、心の中で、あなたがたの明るい小さな家の前で、いつもあなたがたとご一緒にいます。数日後、私たちも休養のために田舎に向けて発ちますが、そちらからまたお便りを致します。『巡礼』は当地では大当たりです！近々パリの友人達に会い、あなたがたのことをお話し致します。お三人に心からのご挨拶を送ります。ではまた近々！

シャルル・ヴィルドラック
ローズ・ヴィルドラック



シャルル・ヴィルドラック



ジヨルジュ・デュアメル

* 『巡礼』は一九二六年発表のヴィルドラックの戯曲の題名。

研究会だより

尾崎栄子

共著『自然手帖』再刊

共著『自然手帖』上・下巻が平凡社ライブラリー版で五月に出版された。昭和三十九年大和書房刊の尾崎のあとがきの一部を引くと「三百篇あまりの文章にそれぞれ特色がある、しかも内容のすこぶる豊かなこの本は、六人の執筆者、一人の画家、つまり七人の人間が激刺たる一年の四季を通じて、一九六二年の夕べ夕べに東京新聞の紙面を飾った合作の一篇である。〔中略〕四百五十字たらずの各篇にそれぞれ挿画がついていて、いかにも贅沢らしく見えるこれらの短い文章は、或いはいくらかの羨望を買うかも知れないが、そういう諸君にしても試みて出来ない事ではない。諸君の身のまわり、諸君の行くところ、一年を通じて自然の題材はいくらでもある。諸君は諸君の文章で、その見たものを感じたことを時に応じ物に即して、或いは素直に、或いは勁抜に書かれるがいい。画がなければなおのこと結構である。そうして書き溜めたものは必ず何かになる。少なくとも諸君の心の富にはなる。そしてその富の蓄積が、諸君の永い人生行路の糧となるだろうことは疑い容れない。

私たちはそういう富の実例を、夢とチャンスに恵まれて、ここで測らずも示したにすぎ

ない。一九六四年」とある。のちに昭和四十三年雪華社から改版されたが今回の平凡社ライブラリー（文庫版 各一二〇〇円）版の下巻には当初の尾崎のあとがき、今回の為の串田孫一氏のあとがき、当時東京新聞の編集者であった梶田満文氏の「解説」鮮度を失うことのない自然讃歌」が載せられている。

日記というものを一年を通して書く事がどうしても出来なかつた尾崎が、たつた一度だけ一年間を殆んど記録したのが一九六二年であつた。内容を読んでみると、それは毎夕「東京新聞」の夕刊を飾つた『自然手帖』への関心の深さからと思われる。

例をあげれば一月七日「東京新聞」の『自然手帖』は「今夕の下村兼史君の「ふろしき包み」へムササビ」で無事一巡。そのムササビがまことに見事だ。焚火のあかりと銃につけた懷中電灯の光をうけて輝くこの小さい動物の眼の色の描写はさすがに下村君だと思つた。そのムササビは結局射たれて風呂敷包みのよう落ちてくるのである。二月二十二日「午前中に『自然手帖』の原稿として先日近くで出会つた木曾馬のことを書き、「町をゆく牧歌」と題をつける」というような記述が到るところにみられるのである。

真に自然を愛する多くの人々にこの本が読まれるよう願つてやまない。

詩碑「御所平」建立

二月十二日、長野県南佐久郡川上村の教育委員会から尾崎の詩「御所平」の詩碑を建て

たいと思うが承諾してもらえるかとの電話があり、二月二十四日四名の方々が打合せの為尾崎家に来訪される。川上村には八つの聚落がありそれぞれに公民館があるがその内の御所平地区の公民館の玄関前に建てたいという希望で、時期は年度内の三月十五日という事になつた。素材は黒御影石縦四尺五寸横五尺五寸との事。

尾崎が訪れたのは昭和十年の正月、小海南線の終点清里駅から義弟と共に歩き出し、念場ガ原・野辺山ノ原の高原の雪道を踏み越えて一月三日の夕刻御所平の宿に到着したのであつた。（『山の絵本』御所平と信州峙）。各連の最後が御所平という言葉で括られているこの詩は、好きな方が多いようである。本人も好んでよく朗読したし肉声のテープも残つてゐる。

今年（平成十年）の冬は、信州では殆んどの高齢者が生れて初めての大雪という程の積雪であったと聞いている。三月十四日に同じ川上村の一一番奥の聚落梓山に行つたわれわれ一行も、踏み荒された跡も見当らない白一色宿は梓山紀行に出てくる白木屋旅館、美しい年寄りになられた女主人は健在で、娘さんとともに甲斐甲斐しくもてなして下さる。この宿には尾崎の色紙「山深み夏また深む梓山なつかしきかな水も故旧も」がある。

翌十五日、前日は晴れていた空からは雪が霏々として降つてくる。除幕式も危ぶまれるような降り方であつたが十一時には空が明る

くなり、丁度式の間の二、四十分間だけ薄日が
もれるという幸運に恵まれた。地元の方々の
他に東京から朝早い汽車で、群馬県の万場か
らも峠越えをして駆けつけて下さった研究会
会員は約二十名、公民館玄関前の松の木を背
にした詩碑の除幕は無事行われた。御所平公
民館は道路に面しておらず、道路から家一軒
分位入った所に建っている。「御所平と信州
峠」に出てくる丸正旅館というのを目当てに
してその前を入ると公民館があるので訪ねて
みたいと思われる方はお見逃しのないように
覚えていていただきたいと思う。小海線川上
駅からは徒歩で十五分位、車で中央道須玉の
ICから信州峠を越えて川上村の県道に交々
した所が丸正旅館の角である。

川上村は今や高原野菜の生産地で、最もリ
ッチな農村であると聞かされた事がある。尾
崎が真冬に訪れた頃、今から六十数年前には
不便な寒村であつたろうと察しられる。現在
活躍している世代の祖父母達の苦労と、その
先見の明によって今のような農業形態が築か
れていた。その事を忘れないようにといふ
思いがあつて「御所平」という詩を選ばれた
のかなという思いが心を掠めた。尾崎は昭和
十年の御所平・信州峠行きに十四枚の写真を
撮っている。その乾板を込んだ袋にあるデー
タには日付けの他に撮影時間、場所、天気等
も記されているのでその写真を堀隆雄氏に六
ツ切に伸ばしていただき、尾崎喜八資料1-1
13号と共に尾崎研究会から川上村教育委員会
に寄贈してきた事もご報告しておく。

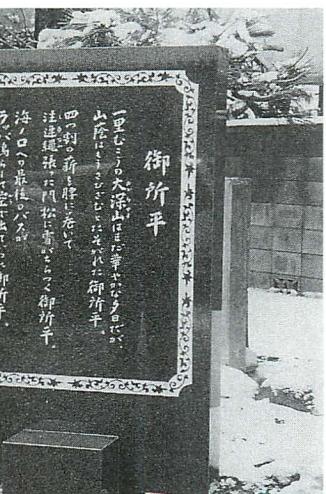
書籍案内

昭和五十一年八月に四季書館から出版され
た『わが庭の寓話』がちくま文庫となつて平
成十年暮か十一年春に出版される予定である。

ジョルジ・デュアメル著、尾崎訳の『わが
庭の寓話』は創元社、創文社から版を重ねた
が四季書館のこれは尾崎訳のデュアメルの文
の一章毎に、デュアメルとの対話のよう尾
崎の文章が入っている。最晩年、雑誌ガーデ
ン・ライフに二十回連載したものを持ち没後
四季書館で上梓された。

四季書館

新井正治氏撮影



『チエロと宮沢賢治』ゴーシュ余聞、横田
庄一郎著。音楽之友社刊。その中には「尾崎
喜八と詩人たち」という一章もあり、チエロ
を三日間で習いたいという願いをもつて上京
した賢治の当時の行動をいろいろの角度から
探求されている。

*

尾崎が生前大切に思っていた友人であり、
尾崎喜八研究会を支え見守つて下さる重
鎮串田孫一氏・北川太一氏・田中清光氏の大
きなお仕事を紹介する。

○『串田孫一集』全八巻、筑摩書房刊。各巻
約五百頁。串田氏と田中清光氏によつて編集
され、各巻に田中氏の懇切な解説が付記され
ている。

○『高村光太郎全集』二十一巻と別巻、北川
太一氏編纂、筑摩書房刊。高村光太郎への長
い道のりの決定版である。

一年の「めぐらし」 平成十年八月まで

蠟梅忌

二月七日、東京青山のNHK青山荘で行われた。伊藤和明氏の挨拶、三宅修氏のお話、懇親会をはさんで小宮静雄氏の蠟梅忌の蠟の字は、平成九年の蠟梅忌で披露された蠟と臘の字源と、名付親の一人である故伊藤海彦氏の文章（著書「鎌倉花信抄」）の双方を検討して蠟の字で納得したという。報告。八月末に富士見高原で行われている碑前祭の今後について、富士見尾崎会の名取正人氏、富士見町教育長の小松睦示氏から報告。会場に展示した尾崎の遺墨や作品、尾崎を写した写真類の説明、今回初めて参加された方々の自己紹介等があつた。司会は野本元氏、参加五十四名。

信州川上村御所平に詩碑建立

三月十五日、詩「御所平」碑が雪の晴れ間に除幕。建主は川上村教育委員会、書は尾崎栄子（詳細は研究会だよりを参照）。

富士見町高原のミュージアム収蔵品展

四月二十一日、六月二十一日、「山と尾崎喜八」と題して山に関わる資料の中で未公開の資料遺品を中心に展示。自筆原稿や山関係の自著、愛用の登山用具などの他、交遊のあつた山の詩人たちの資料も展示。

他グループのイベント「尾崎喜八の世界」

八月二十二日、「自然と人間の暮らしを考えるフォーラム in」主催で、「よなく自然を愛した詩人『尾崎喜八の世界』」というイベントがゆかりの地富士見高原のコミュニティ・

プラザを借りて行われた。主催者側の会員七、八十名に富士見町町民の自由参加。幹事役は尾崎喜八研究会会員の金子康一氏・池田修平

氏の両名との事。「高村光太郎と尾崎夫妻」重本恵津子氏、「富士見町時代の尾崎喜八」名取昇一氏の講演。尾崎の作詞による歌曲その他をコーラスふじみが合唱。他にシャンソン・朗読・マンドリン演奏等が行われる。

詩碑「富士見に生きて」碑前の集い

八月三十日 一九八〇年（昭和五十五年）に

詩碑「富士見に生きて」（原題「土地」）が建立されてから十八年間、富士見尾崎会の諸氏の主催で毎年八月最終日曜日に晚夏の富士見高原で碑前の集いが行われてきた。今年からは主催者は富士見町教育委員会と富士見尾崎会になり、「富士見高原詩のフォーラム」第一回尾崎喜八碑前の集い」と銘打つて富士見町コミュニティ・プラザで行われる事になった。今後の参考の為会次第を記しておく。

第一部（尾崎喜八碑前の集い）午後一時より約一時間、碑前にて行う。開会のこいば、主催者挨拶（尾崎会会長）、祝辞（富士見町長）、献花、喜八の詩碑の朗読（川嶋利哉氏）、喜八の詩朗読（肉声テープ）、お話（西村豊氏）、尾崎家挨拶、閉会のこいば。

* 故伊藤海彦氏の「尾崎喜八への旅」は紙面の都合で休ませていただく。
* 前号（13号）の訂正事項。「尾崎喜八とフランスの作家たち」の中で、《ロマン・ロランからの手紙》二十通は、「ロマン・ロラン文献所」か日本の「ロマン・ロラン友の会」に寄託されているらしく」とあるが、直筆は平成六年に焼失、それ以前に寄贈寄託された事実はないので《》内は削除させていただく。

師・重本恵津子氏）、閉会のこいば。主催富士見町教育委員会。

第三部（交流会）開会のこいば、挨拶（尾崎会・名取正人氏）、乾杯、スピーチ（参加者の中より）、閉会のこいば。五時十五分解散。会場はコミュニティ・プラザ実習室、立食形式、会費一千円。主催教育委員会、尾崎会。特別企画として募集詩作品集の配布、「山と尾崎喜八」ミニ展示、高原のミニージアム一般開放。

編集後記

尾崎喜八資料・第十四号
一九九八年十月二十日発行・非売品
ISSN 0911-3339

尾崎栄子記

尾崎喜八研究会
発行

倉市山ノ内一九七一五一（平247
0062）
電話 ○四六七一三三一一七六一

振替 00270-2-33012 尾崎喜八研究会
印刷 住友出版印刷株式会社